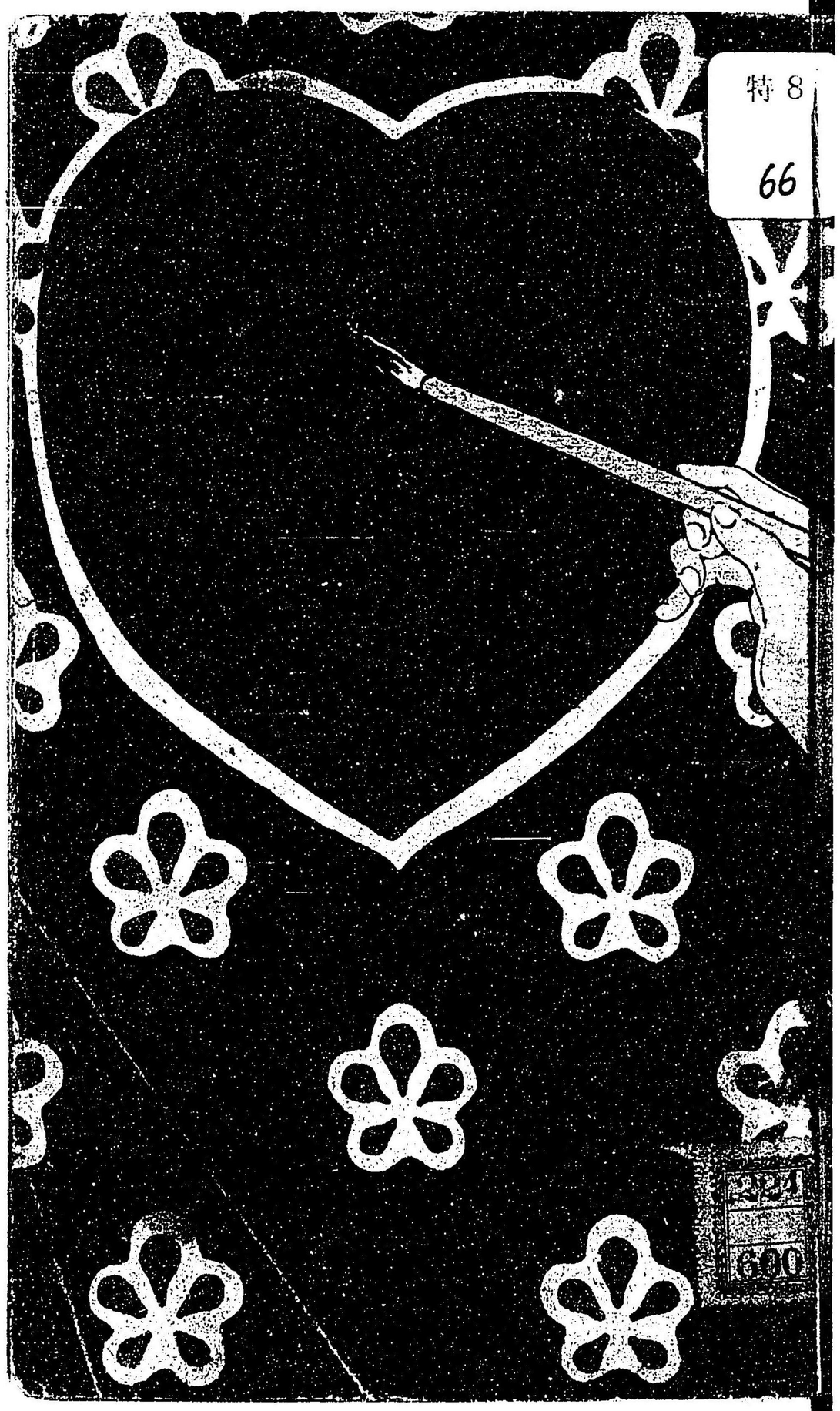

特 8
66

094974−000−5

特8−66

花

江見　水蔭／著

M36

DBQ−2570

道之華
花

はしがき

不自然の裡に自然あり。寫實の間に理想あり。鳥か、蝶々か花か。斷崖千仞の中程に咲く虫取り菫を採つて、野册の中に挾み得たる理想の艷福が、この小説抑もの發端なり。

花光水影樓の主人　しるす

はる
65

花

江見水蔭　著

新理學博士正木直輔は、夏期講習會の招聘を受けて信州に入つた序に、戸隱山の天然花園に植物の採集を試みるべく、唯一人長野市を出發した。

戸隱の中社村で、山案内を傭入れやうと、鎌田平内と記せる名札の古き門口に四明繩の豬束新しき下を潜つて入ると、天井、柱、壁、疊、いづれも煤に包まれて黑光りに光つて居る中に、白髮までが如何やら染つて見ゐる一人の老爺。戸隱竹で籠を編みかけて居たのが、不思議な面搏へで博士を見つめた。

『山へ案内が頼みたいが……』

博士は、ヘルメット帽を脫いで、額の汗を拭きつゝ云つた。

『はァ、お山への案内で御座いますか……はァ……』

老爺、手から未だ籠を下さず。

『急いで呉れんと不可のぢやが……』

『急いで呉れと言はッしやるか、お前様』

『然うだ、大急ぎだ。報酬は餘計に出しても好いから……』

『なにお前様、案内料は極つて居るで、餘計にお貰ひ申す事ァ入らぬでがすが

これから急いだからてゝ、前山がやッとで御座りますぢや。五地藏の小屋で

一晩泊つて、裏山は翌一日もッくり掛りますが……』

『いや、今日だけにして降りて來たい……』

『それがお前様、何も知りなさらぬからぢや。そんな手輕にお山巡りが出來る

譯で有りませぬぢや』

『出來なかッたら途中から引返すさ』

『途中から引返すッて……はァてね、それではお山へわざ〳〵御座らッしやッ

た甲斐が有りませぬぢやが……』

『なに半日も採集すれば澤山だ』

『はァてね。ぢや、御參詣で無いでがすか』

『參詣？』

『御信神で無いでがすか』

『然うぢやァ無い。植物の採集に來たのだよ。花だの葉だの採る爲に……』

『へね、それなら何も私が行きますが事は無いで御座る。お前様、勝手に行かッしやるが好いで。私は、はァ、これでも昔からのお山案内、御信神のお方で無いと先達は致しませんで……』

頗るの不機嫌、指先を戰慄しながら籠を編む力、竹がぴし〳〵四邊に彈ける。

『や、信神せん譯ぢやァ無いが……爺さん、それでは困る。お前が行かなければ誰か無いぢやらうか。誰でも好い、名所古跡の説明は別に入らんのぢやから、誰か一人……』

『有りませんぢや。誰も有りませんぢや。此頃は飯綱平に開墾が始まつたので

はァ、誰も……』

博士は老爺から異教徒あつかひに爲れて、途方に暮れて居る所へ、草苅娘の十四五歳、手甲の紺、脚半の紺、黒髪を包む手拭の白、袖を搦む襷の赤、手織縞の偏衣は草の露に濕り氣見ねて、身肌にきッちりと適つて居る。蛇目籠に半ばの苅草。中に新月の落ちて隱れたると見たは鎌の刄。娘は籠を庭の切株の上に下すや否や。

『伯父さん、妾、戻つて來たよ』

《貳》

老爺は博士に對しての不興顏を、娘の方に向けては北叟笑みて。

『最う戻つて來たかお種。や、未だ半分しか草を苅らぬぢやないか』

『鎌が切れなくなつたから、戻つて來たの……』

と籠の中を振向いて一寸見てお種と呼ばれた娘は言つた。

『又磨いで呉れろか。困つた奴ぢや。草苅が人に刄を附けて貰うやうでは仕方が無いな』

『でも妾には磨げないのだもの』

『磨げないのは未だ仕方が無いが、お前のは直ぐと切れなくするのぢやからのう。今日も亦、無駄な樹を伐つて見たのでは無いか』

種女は首を輕く二三つ振つて。

『今日は蛇を切つたの……』

『蛇を斬つた？』

平内老爺は、眉毛の下に眼の玉を押込むだかのやうに顏を顰めた。

『地梨の下に居たから斬つてやつたの。不思議ねね。刄が曇つて、切味が直ぐと止ッ了ッたよ……』

『そんな事爲るでない。九頭龍樣のお山に近いでないか……女の癖に』

『斬つては見たが、妾も氣持が惡くなつたよ。今日は最う止さうねね』

『仕方が無い、止したら好からう』

此時まで二人の對話を聽きながら、案内者の無いので困づて居た正木博士。突如として口を開き。

『此娘に案内は去て貰へんかな』

種女は初めて博士に注意した。平内は博士の見立と、見立に預かつた娘の働きとに、等分のさげしみを與へながら。

『これに如何して案内が……は〳〵、お山を何處までも手輕に思つて居さつしやるから不可でのウ』

『だけれどお前の方では、何處までも手重に思つてるので困る。そんなに奥まで行かんでも好いのぢやが……』

『貴い寺は門からぢや。戸隱山は麓から險しい上に、道といふ道が無いのぢやから、村の人でも時折には迷ふでがす。其娘が案内したら何處へ引張つて行くか知れませんぢや。は〳〵〳〵』

博士の見立が誤つて居る、その方へ今は多く笑を注いだのを、自分の能力を嘲けられたと取つて種女は。

『伯父さん、妾、出來るよ。百間長屋か五十間長屋の邊までなら、出來るよ』

『なに、和主に、奥の院までなら出來もせうが、それから先きが……馬鹿な。

高慢な事を云うぢやァ無い』

山案内は俺より他には、と自家の技倆を信じる事が深い結果、姪にまで暗に誇り顔の見ゐる平内老爺。

故矢田部博士がトカクシシヤウマを發見した時ほどでも有るまいが、正木博士はこの少女の自ら進んで先導たらんとするを聽いての喜び。思はず知らず、傍へ寄つて。

『お前、行つて呉れんか。お前で澤山だ。案内も仕て貰はんけれァならぬが、これ、此通り、私は肥太ッちよるから、山に掛つてからが歩きづらい。其時此胴籠を持つて呉れ〳〵ば好いのぢやで……』

『その中には何を入れるの？』

『いろ〳〵な草花を。綺麗な花を澤山に採つて入れるのだ』

『花を何にするのだらう』

と種女は不審を打つた。

博士の説明を待たず平内が敎へた。

『藥になるだ。お山の草花は皆藥だ』

『然う。ぢや、妾、行つて見やう。お前樣、さア行きませう。伯父さん、行つて來るよ』

種女は早くも草籠を離れて、採樂函に手を掛けて。

『此所から、妾、持つて行きませう』

平内は編みかけの蠶籠を膝から下して。

『如何も和主の飛歩くにも困るな……ちよッ仕方が無い。案内して上げろぢやが、飛んでも無い方へ連れて行つて、蟻の戸渡りから落ちまいぞ』

《三》

釋長明火定地、博士は前を素通りした。孝子兒の塔、立寄らず。名所、訪はず古跡、尋ねず。奥の院の二社にも參詣せず。直ちに御供所の中を拔けて前山に掛つた。

種女は先に立つて行く。博士は後から從うて行くのであるが、種女が珍らしい

と感じて博士に採れよと勧める草花は、博士に取つて更に用無し。種女が詰らぬと思う物を難有氣に集める博士の所業に、種女少しく勃然として、路といふ路はなき前山の尾上。肥大漢の博士の身幅が、ハミ出して居る程の狹い山頭。難場中の難場に掛つてからは、遠慮無しに先登りして、木隱れに見せぬ姿、これでは何が案内ぞ。おまけに胴籠を取上げられて居るので、採樂した名花が掌中に開いても、胸を突く岩角、攀る時。髯を剃る樹根、縋る時。邪摩に爲つて詮方無し。殘念ながら捨てねばならぬ次第。九十九折に九十九の花を散らして行き。杪羅が吸うた雲霧の、雫と化つて落ちる如く、博士の疎髯からは汗が垂れて、辛じて違ゐ柵の怪窟に到達した時には、氣息奄々。唇に紫の花を含んで居るやう。

『そんなに先きへばかり行ッちやァ困るな。あんまりお前は登るのが疾いよ』

と博士が言う聲、岩の戸に打當てた劫の如くに向ふからも發音。

『お前さんは餘り遲いよ』

種女は此所に待合せて居たが、博士の聲を聽くと同時に又進んで行かうとする

『まァ待て、如何も不可な。そんなに先走つては案内にも何にも成らんぢやァ無いか』

『だッて、詰らないんだもの。妾、最少面白いと思つて來たのだけれど……』

『面白づくで案内されちやァ困る。お前が親切に能く導いて呉れたら、其代り東京見物をさして上げるよ。いつでも私の家へ訪ねておいで、上野の動物園や小石川の植物園を案内して上げるでな』

『東京見物!!!』

『さうだ、東京見物』

『面白いかね？』

『それは面白い、實に面白い』

『面白ければ連れて行ッて貰ひましよ』

『いや、今度連て行くといふ譯には……』

博士少しく困つた。種女は何か考へて居たやうであるが、突然。

『さァ行かうよ、此先きは直ぐと五十間長屋!!!』

『五十間長屋の岩窟？』

『百間長屋も續いてよ』

『ぢやァ行かう。だが、そろ〳〵歩いて呉れ、心臟が破裂しさうだからな』

千仞の大絶壁を戸隱の神の力で、横狀にねぐり取つて、僅かに猿の族のみをして過らせる棧道。若し我々が行かうとすれば、人にして猿を學ばねばならぬといふ大難場。五十間長屋の險、百間長屋の阻、これだ。

博士は衆塊岩の最も著しく現はれて居るのを見て、往古噴火の如何など考へ、よもや此邊に探衆すべき植物は有るまじと、深き注意は其方に加へず。足下に用心して進み、其五十間長屋と百間長屋との境目で、何心なく頭を擡げて見ると、思ひきや其所に虫取菫。紫色の花は蕾であるが、今しも葉の表面に分泌されたる粘液に脚を取られた小羽虫を、葉の両緣で卷込めて、養分を吸收しやうと爲る刹那。

博士は思はず知らず。

『これだ〳〵』

と呼はつて、手を延して取らうとしたが、却々以て達しぬ。
削成したる大岩壁。雲梯なくては取り得られぬ。
『其花は佳いの？』
餘り遠く行過ぎぬ種女は、小走りに戻つて問ひ掛けた。
『虫取り菫だ。これが採りたいのぢや』
『お前さんには取れないの』
『お前に取れるか』
『譯は無いわ。取ッたげませう』
『あゝ取つて貰ひたいが……』
既に此險道を行くのですら危いのに、此上の曲芸として種女は大膽千萬、理學博士正木直輔の肩へ足を掛けて立ち、絶壁へぴたりと身を倚せて、岩瘤と樹根とに手を掛けつゝ、虫取り菫を拔取らうと試みる。博士は山中の少女に踏付けられながら、學術の上には他を顧みる遑なし。下から頭りに氣を配つて。
『それだ、それ、それ、其小さな草だ、未だ蕾の……』

菫百五十種の内でも、これは食肉植物として珍らしい虫取り菫を、斷崖に採り得た博士のようこび。氣も輕く身も輕い種女の功を賞するに急で、自分の肩の塵を拂うのは心着かぬ。

（四）

『此上に慾が出た。ヤタベヤの發見が仕たいのぢやが……如何も時がもるさないな。最う彼是四時半……如何したもんだらう、案内の姐さん!!!』
時計を見ながら博士が言つた。
『最少し行ッて見ませう。これから先きはそんなに無いのよ』
と種女は乘氣。
『そんなに無いとは何が……』
『妾の知ッてる所が……突當りの崖に鐵の鎖が下つて居て、それから先は、妾知らないの。其所まで行きませう』
『よろしい、其所まで……』

百間長屋の岩窟を通り過ぎると、如何にも突當りに岩壁高し。上の樹根から一條の鉄の鎖が釣下げてある、これを手にして登るとならば、格別危險も有るまいが、然うすれば彌々以て魔所に深入りする譯であるから、準備なき探撿は爲す可らずと、博士歸りの支度に草鞋の緒を結び替へやうとして、つひ、足下の岩の鼻にユキツリサウの咲くを見出して、これも採らうと手を延した途端、すると、凄つて、はッと思つた時は遲い。草の穂すべり、つる〳〵と二三間。危く取縋つた白根葵の、それも忽ち根から拔けて、攫んだ儘又もや五六間。岩面を包む薊苔が剝げて、雜木に搦む蔦蔓が切れて、最早辿も留らぬと見ると、博士の頭のみが樅の根に引掛つた。首が寸裂れて飛んだのかと見たは、帽子だけが中途に懸つたのであつた。

これを見下した種女の驚愕は、高妻山の絶頂を越した。

伯父の平内から辿も案内は出來ぬと云はれたのを、無理に出たのだ。氣を着けろと注意されたのを、何んの事があらうぞと聽流した。博士は、虫取菫を採つて上げたので大層喜んで居られたが、其人は今谷底へ陷つて了つた。さア如何

したら好いであらうか。

如何したら好いであらうかといふ問題が、頭腦の中を驅廻はるに連れて、種女の身體も其邊を驅廻はつたが、自分の責任として、これは谷底へ降りて見ねばなるまいと思ひ定めて——若し降りかけて又自分もすべり落ちたら、それまでといふ覺悟さへ極めて、谷底を覗くが如き岩と岩との狹間から、身を釣鐘草の花とすれ〳〵に釣下げて、其下の大樹の周圍をぐるりと廻はつて、矢車草の葉を突破り、岩桔梗を手甲で拂つて、苔桃を脚半で跳ねて、襁の赤は何の花。飛ぶ時は鳥、樹から樹。縋る時は猿、岩から岩。辛じて谷の淸水の潺々を耳にした時、聲の限り。

『如何したね、怪我をしたかね』

答へは無し。

忽ち滿山の杜鵑啼いて、止むとなれば一時。寂寞のきはみ戸閾の深谷。

（五）

砕けたのは岩石で、骨ではなかつた。裂けたのは木葉で、肉ではなかつた。夥多しい鮮血と見たは、酸化鐵泉の流出して居るので、蔦蔓が編出した自然の鈎床の上に、正木博士は危く留まり、氣絶も爲ず、たしかに眼を見開き。擦剝き疵の痛手を揚げて、此所に在りと種女をさし招いた。

木鼠に前渡りをさして、其次ぎから種女は、岩から樹へ、樹から岩へ、端には丈餘の崖を飛降りて來て。

『まア好かッた!!!』

引詰めて居たやうな息と共に吐出した言葉は、腸部から絞り出たのであらう。

博士は眞情といふ暖かな空氣を、全身に吹掛けられたかの如く感じて、種女の顏を見詰めながら。

『好く來て呉れたな。實に、好く降りて來て……呉れたなア』

落ちた時は茫然自失。それから間もなく神經が興奮して、頗る鋭敏に視聽が働いて居たのが、油盡きんとする燈火の消滅に達せんずる樣も斯くや。又もや次第々々に氣も遠く爲つた。其眼で以て、絶壁を降りて來る種女を見た時には、

天女の下界に舞下る姿とまで拜した。

『妾、氣を注けなかッたものだから、飛んでも無い事をしてのけたッけね。勘忍して下さいよ』

『や、お前は惡か無い。私が踏脱したのだから仕方が無いさ』

『お前さん、死んで了ッてたら、妾、如何しやうかと思ッたのよ』

『幸ひにして命は助かッたが、腰の邊を打ッたと見えて……』

『まア下へ降りませうよ。直ぐよ。最う直ぐ下は谷底よ』

裾花川の水源。河鹿の肢を浸す程の溪流、これを前にして、熊が棲み捨てたか一個の岩窟。其所へ種女は先づ入つて、草木の葉を敷並べて臥床をしつらへ、胴籠をさし當りの枕。それから肥大の博士を爲の網から降すのに、今度は踏蹧と爲つて、危く潰れず。

『打ッた所、揉みませう。何處ですか』

まめ〳〵しくも勵はる種女。身を草の床に横へながら博士は。

『や、揉むよか、此手巾を水で浸して、それで此所を冷して呉れ。何、大丈夫

だ。大した事は無いのぢやらうが……』

種女は思浮べた顏で。

『今日採つた草花の中で、打撲傷に利く藥はなくッて？』

博士は微笑を浮べて。

『そんな物は無いよ』

『何故然ういふ草を採らなかッたの』

といよ〳〵眞面目に問ひ掛けた。

（六）

『若し草花が藥用に成るとしても、直接には不可能ぢや。それに私は藥草取りの目的ぢやァ無いからな』

少女の奇問に窮した博士は、辛くも斯う答へ得たが、更に第二の質問が種女の口に發しられた。

『ぢやァ何んの爲に草花を取りに來たんですか』

大學の教室で多勢の學生に向つてなら、精細に講演し得べき博士なれども、深山の窟内で唯一人の少女に對し、植物學の本旨を説明する事は頗る拙。

『調べるので……』

『調べて何に爲るの？』

根まで堀られた。

『たとへば、お前にも名があるだらう。私にも名がある。又身分も銘々有るだらう。職分も……』

『妾の名は種と云つてよ』

『其通り皆ある。これは人間の區別だ。草木にも區別がある。それを私は調べるのが役目……』

『おほ〳〵〳〵』

不意に種女は笑出して、博士は何故に此樣な言を發したのか。怪我をして居ながら串戲を云ひ得ると訝しんだ。

若し又此上の質問を加へられてはと、博士困じて、不器用なる防禦線を張るべ

く此方から問出した。

『私が落ちたのを見て、能くまァ逃げ出さなかつた事だ。此所まで降りて來て呉れたのは實に難有かつたな』

『だつて、お前さんが落ちたんだもの。妾も降りずには居られないわ』

『私が落ちて死んで居たら、お前も死ぬか……』

『妾は本統に如何しやうかと思つてよ。案内して居て、連れて來た人が落ちて死ン了つたら……』

『お前も死なければ濟まんぢやらう』

と博士の串戲は是であるのを、種女は却つて正統に聽いて。

『死んだ方が好いと思つてよ』

襞に、先登りして案内の用には足らなかつた少女も、變事があれば飽くまで責任を負つて立つ親切さよ。正に是は山間の特産である。自然が咲かした花ならずして何ぞ。美しい少女の心、この種女の救助に來て呉れざつたら自分は如何に心細い事であらうかと、博士は急に可懷しさの情を寄せ、早や暮れんとする

窟内の暗さ。深谷の底の淋しさを思はず。昵と種女の顏を見守れば、種女も亦博士の顏を見詰めて、これは氣遣ひの眼光。

『實に嬉しいな。お前が降りて來て呉れたのが實に嬉しい。これではお禮に是非東京見物を爲せなければなるまい』

と博士が云ひ掛けても、種女は、先きに聽いた時程喜ばず。胸に餘る心配を呼吸の度に知らせて、物も言はぬ。

『如何したのかな……何か心配な事でも……』

『……心配だわ……最う日が暮れてよ』

『然うだ……』

『妾一人なら又此崖を登つて行くけれど……お前さんには』

『出來ない。好しや怪我を仕ちよらんでも、迚も此崖は……』

『だから心配なの……』

『仕方が無い。此所に一泊するさ』

種女は鋭い辭で。

『若し熊が來たら如何しますか』

『うむ、熊!!!』

考へざる可らず、戸隱は深山。熊は必らず棲息して居やう。

（七）

然らば熊の襲來を防ぐ謀策をめぐらして、今宵はともあれ此窟の內に一泊と、正木博士は覺悟を種女に傳へて、入口の岩床に夜もすがらの篝火を焚く用意。

椒の枝、笹の葉、燃料を集め來るは種女。

博士は心細き憐寸をたよりに、松の脂を小枝に塗りて、青葉に紅花を見んとするけれど、如何にしても燃付き惡しく、白烟のみ立騰る、其行末は白霧に混じて、雨を呼び、風を招き、雨は溪流を彈き、風は岩壁を打ち、いよ〳〵以て物凄しく、ます〳〵以て火は點かぬ。

博士の拙なる手先に似ず、種女は抱ね切れぬ程の木の葉草の葉、一夜の燃料として此谷を埋めるに足るべきばかり、幾回にも運び來る腕前のたしかさよ。これ

にて好しと見極めて後、博士に代りて憐寸を摺れば、唯一本の火に功を奏して岩戸から初めて光明を射放した。

穴居人種の昔を今見る心地。學識高き理學博士も無し。無敎育なる山中の少女も無し。唯只一個の男と一個の女と、同じ窟の籠居。やれ先づこれで好しと身をくつろげた其時には、同じ安心、同じ疲勞、同じ冷氣、同じ空腹さへ伴つた。

篠竹の筍の細長いのを取來つて、火に炙つては食べながら。

『や、實にお前が來て呉れたので、どの位好運なのか知れないよ。彼の時狼狽して、里の方へでも駈降りて了うものなら、救助の人が又再び來るまでに、私は最う凍死か飢死か。熊に食はれて死ぬか仕て居たのだなア。それにお前が能く何か知ッとるから、焚火も出來た。食物も出來た。斯う爲ッて見ると此窟の內が、立派な家の一室の樣に思はれて、大變に愉快が感じられる』

と博士は口を極めて譽めたが、種女は笑つて居て何とも答へぬ。

『いよ〳〵以て東京見物かな。お禮はそれが第一ぢやらうと思うな。それとも何か贈る事に仕やうか。衣服が好いかな、頭の物が好いかな。うむ、指環は

如何ぢやらうな』

種女は臆する處なく直ぐと答へた。

『何んにも入らないですよ。東京を見せとくんなさい。それが好いのよ』

『私もそれが好からうと思ッちよッたのだ。今度は私がお前の爲に、蜉を飛んだり樹にぶら下ッたりする番ぢや』

『あら、東京にそんな處は無いッて聽いて居たわ』

『うむ、いや、有るかも知れん。はゝゝゝ』

腕部腰邊の負傷を忘れて、斯く語りもし、斯く笑ひもして、一夜を此窟の内に過すべく博士は其肥大の躰軀を草の衾の上に横へながら、足は焚火の方にさし延べて、暖を取り。手は生木の烟を防ぐべく翳して、忠實に火を守る種女の横顏、頰のすべやかに白きが火光に染みて朱らめるを打見遣り、前髮より筆を起して、額、眉毛、其眼の睫毛の長き、鼻筋から唇、腮に至りて留むべき一線を浮世の畫家は如何にして引き得るかと、恍惚たる間に、つひ一トところの睡眠。心づきて眼覺むれば、彼の女も草の衾に埋れて、すや〳〵と夢や何。

焚火さしくべて、又一ト寐入りすれば千仞の谷に眞逆樣と、夢に冷汗、肌寒し。彼の娘や如何にと見る時。外面に何か大怪物、あッと叫んで飛起きて見れば、全身針の如き逆毛の猛獸。

『やッ、お山の罰を思當ッたかな』

斯く言ふは山案内の老爺が聲。簑笠に身を堅めて手に松明。

（八）

今は栗米飯で客を呼ぶ目黑の茶屋を、遠足の目的地として、四角帽二人に盆形帽一人。到達の祝宴を離れの小座敷で開き、口紙の新しい麥酒を五六本拔いて色に出でたる朱は漆紅葉。

二人の携へたはズック製の採集袋。一人のは畫版。袋は輕し、寫生帳風にめくれて開けば皆白し。さては大學生なり我は畫家なりとの目標に留まつて、店の入口『比翼塚御案内』の看板と似たものか。

『やア、駄目々々同じ四角帽でも我々は到底駄目だ。農科でなければ目黑では

持てんのぢやから恐入る』

痩せて髪の薄い方の大學生が、大伸をしながら斯う言ふと。

『然うでも無いよ。今に見給へ、來るよ屹度來るよ』

と肥ねた髯のあるのが腮を撫でながら慰める。

『來るですよ、たしかに來るですよ』

と髪の濃い髯の無い畫家が調子を合せて。

『それァ確かに來るですよ、栗米飯が……』

と下げを付けた。

痩せたのは自棄的に洋盞を乾して。

『君達は相變らず極樂蜻蛉だよ。そんな了簡方で居らつしやるから、先きの樣な間違ゐを生じるのだ。駄目だと見込が付いたら早速切上げんと馬鹿を見るといふ、立派な例を見たばかりぢやァないか。たしかに貝塚に相違ないと云ふから、一生懸命堀つて居ると、其所は先代が剝身屋でしたなんて、長屋の婆ァさんにまで笑はれたぢやァないか。石棒を發見したッてわから、能く見

ると、石の花立だから噴飯の至りさ。麥酒壜の破片を黑燧石の石鏃と云はないのが未だ感心と誉めて置くよ』

『左かし、谷田君。栗島君の考古癖は怪しいとしても、私が美術眼で睨んだ先つきの。あれ、ね、そら、あれは兎に角近來の掘出し物。先づ稀に見る美人ですな』

と畫家は居直つた。

谷田と栗島とは顏を見合せて、笑を抑へながら。

『……む、む、美人さ。正木博士が同伴して居た婦人は如何にも美しいに相違無いが。あれは君、何んと思うかね。ね、青年畫家中錚々の聞ゐある溝谷千花君』

『溝谷君、あれを博士の何んだと思ひ給ふな』

双方から問ひ掛けた。

『あれが正木博士といふ事すら、初めて知つたやうな譯ですから、戸籍調べは私には猶更出來ませんが……令孃ですか、それとも令妹ですか……』

待伏せの笑壺に落ちて二人は思ふ様腹を抱へながら。

『この鑑定違へり!!!』

『溝谷君違つた〳〵』

畫家は眞面目に向直つて。

『へゝ、違ゐましたかな』

『大違ゐ!!!』

と谷田が答へて。

『あれだよ、君、大學で有名な語り草だ。正木博士は戸隱山中から一名花を採集して來て、温室へ入れて無理に花を咲かして了つた』

『それァ如何いふ譯ですか』

未だ溝谷には解し得られぬ。栗島はもどかしとや。

『あれが博士の令夫人なのだよ』

(九)

人の慈いた圖を造らうとなら、今のおのれを自分で寫生したらと思ふ程。青年畫家溝谷千花は暫く無言で眼のみパチ〳〵爲して居たが。

『へゝ、まァ――お半嬢長右衛門君以上の年齢の差……まァ、如何も恐入つたもんですね。實に如何も、へゝ――、まァ、如何も……』

谷田は何を今更といふ體度で以て。

『だが、君、そんなに吃驚する事は無いよ。今日此頃博士夫婦の年齢の相違を見て、これは〳〵と舌を卷くのは、遲し遲し大いに遲いな』

『少くも三年は遲いな』

栗島も亦斯う云つた。

『ちやァ三年前に結婚したのですか』

と溝谷は益々不審。谷田は、我、説明の勞を取らんと、咳のわざとらしいのを一ッ。

『三年前に結婚したとすると、それでは夫人が十四五歳だ。マサカ……ねゝ、斯だ。聽き給へ、先づ盆花植物の生活期を諸器官發育の順序で四期に區別し

た如くさ、博士が彼の夫人に對しての今日までを區別して見ると、三年前が發芽期だ。其發芽期に如何いふ事が有つたといふと、博士が戸隱山中へ草刈の一少女と唯二人で分入つて、崖から落ちたとか、窟で雨宿りをしたとか仕て、何しろ其時に一方ならぬ忠義を少女が盡した、これが第一期……』

粟島が口を出して。

『これから第二の繁蔚期に入りまアーす』

『それで、其、返禮に、東京見物を爲せるといふので、山案内の老爺、たしか伯父だといふ事だ。それと二人を信州の山奥から呼寄せたのが第二期……それは去年の冬であつたが、娘は歸るのが厭だ、博士も歸すのが厭だ。結局老爺だけ歸して了つたが、果然第三の開花期が來つて、室咲の梅は香を放つた此頃は實に第四の結果期である。既に七十五日を幾回繰返へして經過して居るか知れない程の事實を、珍らしさうに聽く君は、到底美術家だよ。浮世の事には縁が遠いよ。新聞探訪的の才は望む可らずだが、最少し機敏に働いて貰ひたいな』

溝谷は頭を掻きながら。

『私は赤門外漢だから、博士の艶聞は如何も知らなかつたです。けれども、そんなに私は世情に向つては仙人氣では無いつもり。醉眼朦朧派では無い筈なのが、あればかりは夫婦とは見得なかつたです』

と、事實ではあらうけれども、信じられぬといふ風。

『若しあれが令孃か令妹かの内だつたら、君は何とか野心でも有らうといふ處だね』

粟島の何氣なき問は、不思議に溝谷の胸を突留めた。

『やッ……有るですな、野心大いに有りで……』

『けれども、君、如何も博士の最う夫人だからなァ』

『いや、それでも好いですな』

『ハッ!!それでも好い？ちやァ有夫姦を遂げやうといふのだね』

谷田が驚いて切込むと。

『私は、自分が人から有夫姦を爲れては厭だけれど、自分が有夫姦を遂るのは

平氣といふ流派なので……』

『わらい流派も有つたものだ』

と栗島さ驚く。

『さかし、遣つた覺には有りませんよ』

と慌だしく打消す。處へ『お待遠樣』と聲して來たのは、顏黑の女中が運ぶ目黑名物の栗米飯。

論題は轉じて『駒場の大學生と目黑の茶屋女』

（十）

本郷で西片町。番地ばかりでは分らぬ何號の何十といふ數字づくめ。毎日歩く豆腐屋でも、幾何學位は心得て居らぬと、廻りそこねるといふ學者街の內で、目標に一本楠の大樹。冠木門の枯手から枝を出して、角燈に正木と記してあるのが讀み難い。

博士は今日の授業を終へて大學を出で、遠からぬ個所とて腕車には乘らず。肥

滿の體軀を我家へと運んで、がらりと開く玄關口の格子戸。鈴が鳴ると、突然お出迎へに奥から出たのは、一頭の洋犬、セッター種の當歳子。銀打の頸皮に少し逆立つた毛は茶褐色。帽子を受取つて行く藏は未だ知らぬが、無暗と尾を揮つて飛つく間に、博士は敷臺の出端へ踵を掛けて無造作に半靴を脫捨て、犬の足跡生々しき廊下を傳つて座敷へ通ると、此所にも泥散らしの絨氈。令夫人の種女は眞中に突立つて居て、何やらむ不滿の色。束髮にフランチルの單衣。脚半手甲の扮裝は消失せても、何處やらに蝶々髷の面影殘つて、花の顏はいよいよあどなし。

『お前よかケンの方が記憶が好によ。ちやんと私の出迎へに出たからな、玄關まで……』

博士は胸の鈕を脫しながら斯う言つた。

『あら、ケンが何んで記憶が好いでせう。今、姜、一生懸命、チン〳〵を敎へるのに、どの位骨が折れたか知れないのですわ』

と種女は不服の言分。

『だつてお前は出迎へなかつた。ケンは出迎へた……それだけ違つてるぢやあ無いか……』

『……でも、ケンは妾が教へて遣つてるのに、貴郎の足音を聽付けると直ぐ、泡喰つて駈出して了つたんですもの。餘り惡らしいのよ。ケン!!!厭なケン!!』

其頸皮へむんずと手を掛けて、引寄せて、二三つ頭を打つた。

『難かしいものだよ。物を他に教へるといふ事は難かしいものだ。妄かし無理に教へやうとしても不可から、氣を長く持んけれァ……』

慈愛深き眼で種女の方を博士はちらと見たが、氣を替へて、チョッキを脱捨て

『なァ、ケン、打たれちやァ詰らないなァ。痛かつたか〳〵』

ケンは連りに博士にじやれて居たが、庭先に小猫を見付けて、一聲吠ゐるや、急に其方へ飛んで去つた。

既にして博士は窮屈なる服の洋を、和の寛濶なのに着替へて、やをら烟草盆の前に座を搏へた。

種女は、脱捨てた貝人の洋服を一抱へにして、たとへば刈集めた草を一處に積む如く、次の間へ山盛に置いて來た。

烟草盆には火が無い、燐寸入はあつても中は空だ。

博士は微笑を含んで。

『種……烟草が喫み、いのぢやが……』

と火入を指示した。

『あッ……如何したんだらう。錦やが居ないもんだから……』

ケンが走つて庭へ飛んで去つた樣に、種女は臺所へ走つて行き、燐寸を取來つて、博士の前に、つるりと滑べり氣味に坐り込んで、突如摺つた燐木の火を、博士が口にして居る卷莨の先に點けて進せた。

『危い事だ。背を燒拂はれるかと思つたよ』

『おほゝゝゝ藏山と間違へてお留め山へ火を點けた事があつてよ』

と種女は邪念微盡も含まぬ高笑。

博士も連れて笑を洩らし。

『私の背を燒拂ッたつて、藏は出んよ』

《十一》

錦やと呼ぶ小間使は、種女夫人と科を同じくする植物で、發育の年數も大して違はぬ。生れが東京だけに、幾分か世間馴れては居るけれど、博士の留守には御新造と一所に廂轉んで新聞を讀む。お手玉を取る。買食を爲る。今や藤村から餅菓子を買來つて、門を入る時に郵便配達夫に出會して、書狀一通受取るや否や、駆込んで、それでも主人の歸宅に心づき、片手の物は後へ隱して、片手の郵書のみを差出し。

『旦那樣、お歸りあそばせ……あの、郵便が參りました』

『郵便か……それよか、後に隱した物か欲しいな』

と博士は揶揄しながら、書狀を受取つて封を開く。種女は奪ふが如く布呂敷包を取上げて、へギ包を開く。鹿の子はお生憎さまで、渦卷、紅梅餅……蕎麥饅頭を一個、手早く抓んで口へ入れて、更に一個を錦に突付け。

『お食べよ……お牧婆ァさんにも一個遣らうかね』

博士は此方に頓着せず、手紙を讀んで居る。庭のケン、又もや座敷へ土足の亂入。うろ覺ねのちん〳〵をして、一個頂戴と菓子に媚びる。二人は面白がつてちん〳〵やちん〳〵と、大騒ぎして居る間に、博士は手紙を讀終つて。

『……二三日内に……と、最う直きだが……』

獨語して、擴げた儘の手紙を膝の上に載せ、此方を見返つて。

『私も一個貰ひたいものだな』

種女は、手の延びるだけ延して、突付けたやうに黄金饅頭。

『貴郎もちん〳〵を爲さいよ』

錦は『おほゝゝゝ』と笑入つて、それでも茶を汲みに立つて行く。博士は少し敗まつて。

『そんな事を言うちやァ不可がなァ』

『いけないの？』

と種女は不審の面持。

『や、これまでは仕方が無いが。今、手紙が來た。私の姉が國から來るので——

最う二三日の内に……』

『姉さんが來たつて好いぢやァ有りませんか』

『私も差支は無い、お前も差支は有るまいが……姉さんが來てからは、今までの樣では不可から、何かに氣を着けて呉れなくッちやァ……』

『好いぢやァ有りませんか、貴郎の姉さんなら……』

『それは好いさ……好いのだけれど、其所が如何も困るのだ……』

『困る事がそれに書いて有るんですか……』

『なに……手紙には、唯、二三日内に向ふを出發するッて書いてあるばかり……』

『それなら分ッてるぢやァ有りませんか。貴郎の姉さんが此方へお出でなさるだらうてねのは、前に話もあつた事で、妾は早くお出でなされば好いと思つてますの……』

『む……本統にお前は……』

自然だよとは極めて低い聲であつた。

『如何しましたか……』

と膝へ手を加へてもすぶらうとした。

『何さ、何んでも無いよ』

『妾が如何か仕たんですか』

『如何も仕ないが……これから音無しく仕なけれァ成りませんよ』

(十二)

博士が書齋に入つて植物の研究に熱した時には、夜を更かして、一時二時に到る事が珍らしからぬ。

今宵も博士は一室を出でず。時々紅茶を呼ぶに留つて、濫に人の入るを許さぬ。錦やは、欠伸から、足の横捻りから、頰肘を突くのから、次第々々に深入りして、後には額に疊の目の紋形を附けるべくつッ臥して了つて、如何やら齒軋りから寢言を呟くとまで進みさうだ。

死んだ學校の小使の寡婦で、お牧といふ婆ァさん。買物の出歩きだけは錦やに

さして、臺所を働く、お針も爲る。何でも爲るが、何んでも、手のろい。だけれど、正木家に無くてはならぬ忠義者で、種女は金錢の出納まで任して置くが附け落しはあらうとも附け掛けなどは決して爲ぬ質。五目飯と精進揚が好物で毎日の樣に交代の手製。此老婆が獨斷を爲るのは、此時ばかりと云つて差支が無い。

洋燈の下で甲縁の眼鏡を力に、針の穴へ糸を幾十度となく通しそこねて、たとへば、笹子小佛の險に大壓道を通せしめるよりは、此方の手元を大難工事と心得て『どッこいしよ。や、どッこいな』と掛聲を仕ながら進つて居る。

種女は腹這ひに寢轉んで、足の先きをばた〳〵跳ねて居たが、頰杖のくづれから口を切つて。

『最う寢やうか知ら……未だ旦那樣は中々のやうだからねね……』

お牧は折角見當のついた針の穴を見捨て、眤と種女の顏を糸の通る程見詰めながら。

『お唖けれァ仕方が有りませんやね……最う二三日の內ですからね。好き自由

にして居らつしやいまし』

唖い眼を種女はパッチリと見開いて。

『何が最う二三日なの……』

『何がッて貴女、然うぢやァ有りませんか……お分りにならないのですか奧樣に』

『分らないわ。妾、何んだか知らないんだもの。何ァに……』

『だッて。考へて御覽なさいまし。旦那のお姉樣が入らッしやるのでせう』

『然うなのよ……』

『ですもの、今までの樣に仕て居らッしやる譯には參りませんよ』

『何故いけないの』

と不審晴れやらず。

『まァ貴女は……お年が行かないから仕方が有りませんものゝ、少しはお考へなさいましよ』

と云つて、糸を持つ指先、ぶる〳〵。

『考へてるわ』

『ですからさ、妾が申すのですよ。お姉様といふのは、何んでもお若い内に早くから後家にお成りなさッて、今日までそれで通して居らッしやッたのださうですね』

『然うだッてねね』

『然うだッてねね、ちやァ有りませんよ。其所を能く考へて御覽なさいまし。然ういふ方ですから、中々氣が強くッて居らッしやるだらう、と、まァ妾なら直ぐと考へますねね』

『だッて好いちやァ無いかね、氣が強くッても……』

『未だ貴女はお分りなさらないよ。能う御座んすか、然ういふ氣の強い方ですから、旦那様のやうに、何んでも好し〳〵と云つて打遣らかしてお出でなさるやうな事は、如何したッて無いだらうと思ふのですよ』

『……牧や……旦那様のお姉様だから、お氣が強からうが如何だらうが、矢張妾を可愛がッて下さるだらうと思ふよ。早く入らッしやれば好いのねね』

『其お氣なら結構ですが……』

未だ糸は穴に通らぬ。

《十三》

上野停車場へ青森からの滊車が着いた。と又此方から發しる列車がある。午前九時半頃は最も驛員の多忙な時で、乘る人も多い、降る人も多い、出迎への人も多い。

正木博士は夫人種女を同伴で、宇都宮から來る姉上を出迎へに入場切符を求めてプラットホームに入り、一等室、二等室と眼を配つて、たしかに此列車に乘つて來た筈と、見ぬ姿に不審を打つて、若しやと、三等室から爭つて出る人々に注意すると、目的の人は其方から今や降り立つ處であつた。帶の間から赤切符の頭が見えて居る。片手には、毛布で卷いて細帶で胴締のしてある大包。片手には、麻繩で十文字にからげてある柳行李。其中心に立つて、絶大なる荷物を支へて居るのは、痩せて丈の高い、髮の薄い、色の黑い、五十に近い婦人

であるのに、此力量？　此忍耐？を有して居るには、一驚を喫して振向く者が多い。

博士先づ歩み寄り。

『やッ、そんな荷物は、赤帽にでも持たしたら好いでせう——御挨拶は後にしますが……』

『なァーにお前、そんな事は無駄だよ』

博士の注意を劈頭第一に斥けた姉なる人は、駒下駄の音高らかに早や歩き出したので、博士は迷惑の顔つきをして後から附從ひ。

『持たした方が好いですがなァ……無駄な事は無いですから』

『なァに、一里も二里も有る譯ぢやァ無いのだらうから……』

益々博士は困つた風で。

『如何も不可ですな、貴女がそんなに持つては……』

『それならお前さんに一個持つて貰ひませう』

理學博士に柳行李を提げさせるのは、氣毒である。

種女は此點は平氣で。

『妾、持ちませう』

と傍へ寄ると、姉なる人は大きな眼を光かして。

『此人は……』

博士は中々以て多忙である。

『や、いづれ御引合せしますが……あの、これが妻で……』

『あッ、この方が然うなのかね』

姉なる人には、前に種女の年の若いといふのは知れて居たが、會つて見ると餘りに若いので、意外の感。

種女も姉が氣の強い人とは、嚙んで含められるやうにお牧婆アさんから聽いて臟氣に想像をつけては居たが、餘りの氣の強さで、これも意外の感。

今來た列車は機關車だけ脱して、他の線路へ移るべくヤードメンの旗色を見て

『ぽッ』と一聲。ストップハーの個所まで進んで、ポイントメンが獅嚙面の側を通り過ぎた。

是で機關車は全く線路を喰違て了つた。

姉なる人は、白銅一個を惜しんだ爲に、初對面の弟の嫁女に荷物を持たせねばならぬ事に立至つたのを、未だ少も悟る處無しに。

『ちやァ此方のを一個持つて下さい』

でも、輕い方を渡した。

生憎赤帽は近くに居らぬ。居れば如何かして持したらうのに、博士も仕方が無いから、種女に持したのを氣毒とは思つたが、其儘にして、改札所の方へ向つた。

最うあれ程の乘客、大概出て了つて、殘つたのは四五人。驛員や物賣や何かゝ大勢此方を見て居る其間を、種女であればこそ、顏赤らめる事もなく、平氣で片手に柳行李。

（十四）

宇都宮から上京して來た正木博士の姉の名は、衆乃といふのである。嫁した先で貞人を喪ひ、寡婦になつて實家へ戻つた時には、兩親が最う歿なつて居た。

正木家には衆乃と博士直輔との間に、一人の男子があるので、此人が財産を繼いで現に戸主である。博士は別家して族籍は平民だ。

男まさりの衆乃であるから、其戸主も、博士も、中々姉女には頭が上らぬ。殊に博士は學生の內に、一方ならぬ世話を受けて、先づこれまでに成つたのは、衆乃の力、預かつて功ありと云つたやうな有樣であるから、本來なら狹くにも引取つて居なければならなかつたのだ。博士も其心。姉なる人も無論、それを心搘へにして居たのであつたが、何分にも博士は學術研究に熱衷して居て、未だ一家を成さなかつた。けれども決して獨身生活論者では無い、雄雌兩蕊の花果器官を熟知して居る人に、かゝる不自然の理屈を實行する程の愚は無い筈なのだが、博士には實に立派な懸人があつて、他を全く顧みなかつた。

その懸人の名は『植物』

その爲に博士に成つてからも、牛込の某寺の奧座敷へ下宿して居て、書籍と標本との間に埋まつて居た。と云つて、植物一方の知識ばかりかといふと、礦物

の方にも精しい、動物の方にも通じて居る。人間の方にも精しく通じて居る。普通の交際は辭せぬのである。宴會の席で奇拔な隱し藝などを出す。それは理學應用の手品、掌中に花を開かせるといふ、さかし、之が一本槍で、二の矢は次げぬのだ。それも氣に向くと飛んでも無い時に演じ出すので、中には吃驚する人もある。能く知る人は其無邪氣を喜ぶのである——斯う記して見ると、博士の長じて居るのは植物學。短は人間學。活社會を知るのが薄いといふ事に成るけれど、然うでは無い、植物學にのみ頭腦を打込んで居る人としては、滿更世の味を知らぬのでも無いといふに留まるので、唯、さかし人ば其短處に跨る。博士自らでは充分に世態人情を嚙分けて居ると信じて居る。それだけの事であるのだ。

然ういふ譯で、實際姉女を引取る事が出來なかつたが、必用に迫られて——植物の標本が多く殖ゑて、置き所がなく爲つたので以て、寺の奥座敷から西片町の現住に引移つた。お牧婆ァさんと錦やとで一家を成した。

姉が來る前に嫁が來た。嫁が來たら姉を呼ぶのが、ちと何となく烟たく爲つた

だら〳〵に迎へるのを延して居た所へ、向ふから出て來るといふ通知。無論如何も斷はる事は出來ない。出迎へに行つた。潔車から出た。其時既に早や極小ながら衝突があつた。

姉の衆乃には、氣に入らぬ事だらけである。自分に相談無しに嫁を娶つたのが第一……其嫁が餘りに若過ぎるのが第二……若過ぎるのみか、禮儀作法を知らなさ過ぎる、ばかりでは無い、家の事を何から何まで知らなさ過ぎる……お牧といふ老婆が氣に入らぬ。錦やといふ女中が氣に入らぬ。家の中のだらしの無いのが氣に入らぬ。博士がそれを擁はずに居るのが氣に入らぬ。屋敷が氣に入らぬ。西片町が氣に入らぬ。つまり東京が氣に入らぬのだ。

これは來た日、既に、直ちに、衆乃刀自の痼疾へ響いたので、これが宇都宮なら。最う、大怒鳴りに呵り始めるのであるが、さすがに來立て早々然うもならず。すべての代表者として槍玉に揚げたのは、憐れむべしケンである。いつもの傳で平氣な顏して座敷へ上る處を。

『まァ此犬は、何んてこッたらう行儀の惡い』

烟管で頭を力一杯撲つた。

《十五》

秋さびし。植物家の庭でありながら、紅葉する木の一本も無い。門に近い楠の大樹の下に塵捨箱があつて、其脇に、先住の人が根を遊したのか、野菊の二三株。花は其所でも開き初めて、白と、黄と、さほらしの光景。

無惨なるかや飼犬のケン。いつもの如く座敷へ上ると、見知ぬ人に呵られる。腹が立つから吼へると、押付けられて、それは酷く撲ちのめされる。口惜しいから噛付かうとしたので、不届至極と縄で縛られて、垣根の竹に結付られる。何をとばかり喰切つて逃げた結果が、今度は鉄の鎖で楠木の根に繋がれて、宛然狂犬あつかひ。

戸隠平、飯綱原、廣々と何處までも我家の庭の心であつた種女。此頃は別して家の内を狭く感じて、窮窟さに耐られぬ。博士が學校へ出勤の留守、姉女に火鉢の前を奪はれては、座敷に一人淋しいかな。お牧はこぼし、錦やはさよげ

ケンは此方へ來られぬ其苦しさを悲鳴に洩らすを、聽いては自分が先づ悲しく庭下駄を穿いて其方へ行つて見ると、喜んで、尾を振つて、飛付かうとして、抜けぬ大木、断れぬ鉄鎖。

『ケンや、可哀さうだねい、ケンや、ケンや、ケンや、可哀さうなケンやだねい』

と頭を撫て遣り、親愛なる接吻を掌に受けて。

『お前は本統に可哀さうだよ』

としみ〴〵其顔を打眺める。ケンは何度も〳〵種女の膝に飛着いて、好意を以て泥土を附けて居る。

『何も無いねい、お前に何も遣る物が無くッて、本統にまア氣毒ねい』

と云つて手持なく唯立つて居たが、不圖野菊を見出して、何心なく其白の花を取り、くゝりを解いて振落すと、放縁小花亂れ掛つて、ケンの毛色が抜替はる、かと疑はれる。

『お前ねい、妾ばかりだこねい、どんなに暴れたッてねい、搏や仕ないんだけ

れどねに……如何も仕方がないのだよ。そんなに縛られちやア、さぞ、窮屈だらうねね。厭だらうねね。ケンや……ケンや』

ケンは若しちん〳〵でも仕たら、何か呉れるだらうと思つたのか、突如後足で立つた。種女は其袂の内に菓子は無し、ケンの如何に飢えたるかを思ひ及んだ時に、耐にられぬ程悲しさを感じて、一層の事解いて遣りませう。繋いだのは姉様であらうとも、あまり不憫だからと手を掛けた時に、臺所から腰を曲げて走つて來たお牧婆アさん。聲を殺して。

『お止しなさいましよ。それでは角が立つ。我慢なさいましよ。ちッと此所はお耐になさいましよ』

と袖を引く。ケンまでが袖を嗚へる。

『だッて、餘まり可哀さうだもの……』

と涙含む種女。

『其所で御座いますよ、何んでも其所が其所で御座いますよ』

と低い聲音に力を入れて、有りも爲ぬ歯を咬合せて、石を抱いた時のやうな顔

をして見せる。

知るや知らずや臺所で、衆乃が甲聲。

『あれ、誰も居ないのかね。猫が戸棚を狙つてるよ、不用心な……』

（十六）

正木家の座敷といふ座敷が悉く荒野の如く取散らされて有つたのを、衆乃が來てからは其所此所と餘程、手を入れて整理けられた。

唯だ博士の研究室のみは、衆乃の踏込むまでも無い。前から秩序が整然としてあつて、殆ど別な家かと思はれる計りだつ。

和風の部屋の建築を洋式の裝飾に改めて、硝子戸を嵌めた書架がある。標本陳列の棚がある。椅子に卓子、横手には安樂椅子。壁の上にはカアペット窓にはカーテン、入口の扉は錠が下りるやうに造られてある。

若しそれ書架と書架との間にでも入れば、深谷の底に居るが如く感じられ。戸を殘らず締切つた時には、甲高の物聲も傳はらず。深山の寂寞に異らぬの

である。

リンチ氏の所謂花時計の示すツキミマンテマの萎む時刻、博士は球洋燈に照らして、熱心に植物解剖の研究。參考の洋書五六冊前に並べて、彼を讀み、是を閲し、ペンを走らしては記入して居る。折柄、突然、扉の開く音。

何人たりとも研究中は、この室内に入るを許さぬのを、と博士は不興氣に其方を見ると、姉の糸乃が、牡丹餅を載せた皿を持つて入來れるのであつた。

『直さん、退屈だらうから、おいしくは無いけれど妾がこさねたのを……』

博士は額に手を加へて俯きながら。

『……私は……夜は何も食べん事に極めて居るですから……』

姉は、そんな事で引下るのでは無い。皿を卓子の上に置いて。

『然うかね。だけれど折角持つて來たのだよ。お前に食べて貰はうと思つて、わざ〳〵製ねたんだから、一ッでも好いよ、お上りな』

博士は困じて手を振り。

『いけません〳〵、夜は液体の物より他には用ゐんと極めてるので……夜を更

かす者には、直ぐと胃に障るですからな』

糸乃は不快に感じて、勃然としながら。

『ぢやァ仕方が無いね。なに、妾はお前が然うして勉强して居るのに、誰も傍に來て何かの世話を仕ないからね、氣を利かして、お茶でも入れやうと思つたんだけれど……』

『いや、御志は、謝しますよ。難有いのですが……私は、勉强中は、誰も傍へ入れませんので……用があれば此方から呼ぶといふ風に……ですから誰も參らないので……』

『だがね、家内といふ者は然うしたものでは無いのだからね。お種なんざァ用がなくッても、旦那樣の所へは時々來て、御用を伺ふといふ樣に仕なければならない譯なんだけれど。何分年が若いから、仕方も無しさ……』

と何どなく廻はして言ふ。

『あれも用のある時には、それは呼びます。傍に來て指揮を待つて居ます。一家の主婦としては幼稚ですが、研究室の助手としては老練ですからな』

『それがねね直さん……いね、それが直さん、何んだよ、妾にちッと言ひたい事があるのでね……』

衆乃は室の隅にある椅子を見付けて、博士の卓子の前に持つて來て、御輿を据る。

『云はう〳〵と思つて居たのだが、幸ひ今夜は……』

『今夜は困りますな、又亦はる時が……』

と博士迷惑の極とは知らず姉女は平氣で。

『だがねね、直さん!!』

《十七》

斯う爲つては仕方が無いから、博士は卷莨に點火して一吹しながら。

『何んですか、姉さん』

衆乃は、忙がし氣に瞬き數回。

『だがねね、直さん』

蒔直しの注意を與へて。

『妾はお前さんの爲を思ふからね、遠慮會釋無しに言ふのだがね……』

『へね、如何か……』

『妾が此方へ來てから未だそんなにならないのだけれど、何から何まで妾にはちやァあんと分つて居るのだがね』

『へね、何がですか……』

『家の事がさ』

『へね——』

『如何も妾の性分として見て居られないんだよ。齒痒くッて……お前さんも子供、お種も子供。子供同士で飯事をしてるやうなもんだからねね』

『左樣ですかねね』

『左樣ですかねね、もないもんだよ。お前さん最少確り仕なけれァいけませんよ』

『如何も此上確り仕ろと仰有ッたッて』

『お前さんはまァ仕方が無いやうなもの丶、お種はあれではいけません。弟嫁の讒訴を爲るのは能く無いけれども、誰が目で見たからつて、あれでは仕樣がありませんよ。何も今更妾だッて、何故あんな者を嫁にしたと、溯つた事は言ひませんさ。けれどもね、正木直輔の身の爲を思つたら、姉の身分として默つては居られませんよ』

博士は姉から斯う言はれると一句も出ないので、烟たさうに卷莨を吹きながら。

『其は私も考へないでは無いのですが……』

『考へて居るのなら、何故それ〳〵に敎育ないのだね……』

『それが未だ、年齡も若いですし、浮世を知らん山中の出ですから……まァ急に如何斯うといふ譯には行かないつもりで……姉さん、私は何んでも氣を長く敎育するつもりですが……』

『いけません〳〵、それァ直さんいけません。何んでも嚴しく今の內から仕て置かないとね、次第々々に間違つたなりに固まつて了ふもんです。妾はね、斯う思つてるのだがね、家事上の何は及ばずながら妾が見て遣りますが

第一に仕込まなければならないのは、行儀作法だね。女禮式は一通り覺にて置かなければなるまいと思うのだがね、それに、まァ、如何しても茶の湯、生花……お前さんの家內なら、最初はねね、生花が好いだらうと思うがねね』

『生花……不自然ですな、あんな不自然な物は有りませんな』

『だッてお前さん、そんな事は云つて居られませんよ』

『生花を習ひに遣る位なら、造花の稽古に學校へ通はします』

『飛んでも無い、女學校なんかへ……此頃の不評判に氣が着かないのかね』

『着かない事も有りませんが、生花の弟子入よりは好いだらうと思ふですからな』

『そんな事言つたらお前、敎育やうが無いぢやァないかね』

『實の處、今日の場合では、女子の敎育は餘程困難で有ります。止むを得ねば其人其者が敎育するのですが、私には如何も急に出來んので、それよりも自分で我慢して居れば好い。滿足主義が好いと、斯う極めて居るのですが……ねね、姉さん、自然に委して置くのも亦、敎育の一法ですよ。自然の感化が

却て功を奏しますよ』

『お前さんの樣に言へばそれまでさ』

（十八）

窟の内の一夜、其所の宿りの世帶を見事に切つて廻はした手腕も、都の屋敷に入つては一向に現はれぬ種女。糸乃から攻撃されるのは當然である。

雫垂る岩天井、草を蓆の其時に、博士をして美麗なる家屋の内に在るが如く感せしめたのが、此方へ來てからは家の内を、荒野の如く荒らして心着かぬ種女を、糸乃の武家式の家庭で成長した目から視たら、打捨て置く譯には斷じてなるまい。氣を長く自然に委せるなど、博士の言うて居る事を、然うか、左樣かと。如何して默つて聽いて居られやう。糸乃は『其樣に打遣らかして置いたなら、お前だッて博士には成れなかつたらう。お前の世話を燒いたのは妾だよ妾が有たからお前も成功出來たのだらう』といふ樣な論鋒で、博士の自然說を打碎いて了つて、近日から生花茶の湯の稽古に通はせるといふ事に極めて、や

うやく研究室を引取る事と爲つた。其代り牡丹餅までは强ゐて薦めず。すごすごとそれを持つて出で去つた。

博士は姉の去るのを見送つて、卓子の傍を離れ、安樂椅子の上に其肥大の體をどッかと投出して、少時は胸苦しい樣な呼吸を續け、彼の戶隱の斷崖、鷲蔓に搦まつた時のやうに、身動きも仕なかつたが、物憂氣に起上つて再び卓子の前の椅子に腰掛け、呼鈴一回聲。

鳴らしたかと思ふと直ぐと扉を開いて、入來つたのは種女。

『……御用……ですか』

『おう、種さんか……大層早かッたな』

『……戶の外に居たのですもの』

『何故戶の外に來て居たのだな』

『用がありますから……』

『用があるなら何故這入つて來なかッたのぢや』

『無闇と這入つては悪いと思つてます』

『……好いから其所の椅子へまァお掛け』

『貴郎!!』

言ふと同時に、腰を椅子に落して、腕を机上に置いて。

『如何したら好いでせう、貴郎!!』

と聲がふるねて――眼には露。

『如何したのだな、種さん、だしぬけぢやァ分らないが』

『貴郎には分ッてませう。妾は本統にイケないのですから……』

斯ういふ場合には、博士益々以て困つて了うので、如何して好いか分らないのだ。

『種さん、お前がイケないのイケなく無いのと、それは今の問題ぢやァ無いのだが……若しイケないとしてお前は何を言はうとするのかな』

『妾は、貴郎、本統にイケないのですから、最う信州へ歸らして下さい』

彼の女は故山の雲に入らんとする希望である。博士は浮世に馴れさせやうと、これから宣告せねばならぬのである。

（十九）

『それァ不可な。そんな事を言出しては困るぢやァ無いか』

博士は水氣を斷れた或る植物の如く打萎れて斯う言つた。

『だッて貴郎、妾も困るぢやァありませんか』

と言つて種女は光線に離れた或る植物の如く打萎れた。

『今更お前、信州へ歸らして呉れねなんて……然ういふ事は言はれない筈なのぢやが、種さん、それとも本統に信州へ歸りたく爲ッたのかなァ。此方が厭に爲ッて……』

『信州へ歸りたかァ有りません』

『歸りたく無いけれど歸らして呉れろ、ぢやァ話が理屈に合はない。考て見ると全く此方に居るのが厭に爲つたんだね』

『然うでも有りません』

『益々分らない……如何したと言ふのだな、其意を得んぢやァ無いか』

『だッて妾はイケないのですから……迚も貴郎の奥様に成つて居るだけの……妾は草刈が身にあるんですから……』

と言つて、はら〳〵、露は一時に雨と變じた。机上の腕に面を伏せて、しやくり泣きする種女。博士は椅子から立つて、後へ廻つて、覗込むやうにして。

『そんな事は丸で問題ぢやァ無い……だが、私は何んとも思つて居ない。お前が一家を治めて行くのが拙な事は當然と思ッとる。其内には段々巧みになると氣を長く樂しんで居る。が、なァ、姉さんから見るとそれでは不可といふので、打遣らかして置くのを咎められて、先程それに就て話があつた……』

面を上げず袖に籠る涙聲で種女は。

『……妾に生花の稽古に行けッて……』

『最う姉さんは言出したのか……』

『妾は、何んにも知らない者ですから……仕方が有りません……』

『仕方が無かァ無い……有るのだけれど、私の考へ通りに姉さんが任して呉れないので、今度の始末だ……先づ、さかし、それは後へ廻はして、第一にお

前に言つて聽かせなければならん事がある……』

『何んですか……』

腥ればッたい眼を見せた。面を擡げて。

『種さん!!どんな事が有つても、信州へ歸るなんて事は言はれませんぞ』

『……』

『これから後に、どんな事件が生せぬとも限らんな。其時、ともすると信州へ歸らして下さいなんて、そんな事は決して言はれませんぞ。輕々しくお前と私との間が斷たれるものと思つて居ては、甚だ好く無い。又最一ッある。妾は草刈が身にあるなんて、そんな了簡を何時までも持つて居ては、實によろしく無い……お前は今日では、既に正木直輔の妻なのだから、其妻たる態度を何處までも保たねばなりませんぞ』

『……妾は……』

『いや、これに就てお前は何も言はれません。お前の伯父さんが、お前を置いて信州へ歸る前に、迚も和主は學者の妻として立つて行く事が出來ん。東京

で世帶を持つて一家を治めるといふ事は和主には難かしいから、それよりは矢張山の中へ歸れと言つた。それを私が、決してそんな事は無いからと强て賴んだので、伯父さんも漸く承諾して、改めてお前に辛抱が出來るかと訊ねたら、お前は屹度辛抱すると誓つた。それなら中途で歸つて來るやうな事が有つても、決して家へは入れませんぞと伯父さんが言ッたぢやァないか。お前は歸るなんて事を口に爲れぬ義理ぢやァないか』

(二十)

『妾は……歸るッたッて、伯父さんの家へは歸りませんよ』

種女は思込んだ調子で、きつぱり言つた。

『ねッ如何したッて……』

博士は驚いた。

『それなら何處へ歸る意なのだな』

『妾は……貴郎と一處に這入つてました窟の中へ歸ります』

と言切つて、又も劇しの涙。兩の袖で顏を覆うて了つて、何やら未だ、口の內袖の內。

『何故そんな悲しい事を言ふのだらう、窟の中へ歸るなんて……』

博士は得耐ねず、ノートブックの面に紫色の涙二三點。

『妾は貴郎、子供の內から兩親を失くして……伯母さんも亦死んで了つて、伯父さんの手でそだてられたんですが、伯父さんから見放されたら仕方が有りませんわ。窟の中へでも行くより……』

『伯父さんは見放すか知らんが、私は見放すとは言ひはせんのぢや。お前から見放して歸るといふのぢやァ無いか』

『でも、姉樣が……いゝ、あの、姉樣のお氣に妾が入らないのですもの……迚も妾見たやうな者が……』

『それがいけない、自分で自分を捨てるには及ばんよ……それァねゝ、姉さんは昔氣質で、あんなに口喧しい處があるけれど、腹の中は好い人なんだから少しの事は我慢して、ねゝ、其內にはお前も、馴れて來る、分つて來る、樂

になるのは直きだから、今の間を辛抱して、生花の稽古にも通はうし、茶の湯の先生も迎へるさ。それで家計上の事は、すべて姉さんの指揮に從つて、能く道方を會得がよろしい。然うして家庭を面白く暮らさなければ、人間の生涯を我と我でツマらなく爲るやうなものだから。好にかね、分つたかな』

博士は親切なる講義の口調で言つた。

『家庭を面白く暮らさなければッて……それなら貴郎、姉様が入らッしやるまでに、家庭が面白う有りませなんだか』

種女の顏には最う涙が無い。蓮の花が開いたやうに面を見せた。

『……む……』

『妾は面白かッたのですよ。貴郎、妾は姉様が入らッしやると、此上どんなに面白くなるかと思つて樂しんで居たのですよ』

と言つて恨めし氣に博士の顏を見た。

博士は益々困つた。と同時に、若き妻を或る場合では稚き娘と思つて居たのがこれ程の事を言ひ得るかと驚き、其驚きから引いて更に嬉しく愛らしく、我知

らず手を脊に加へて、撫下して。

『好いさ〳〵、好いから、そんな事を言はないで、先づ何も修養だからな……若い時には、種々經驗を積んで見るものだ。辛抱して先づ姉様の言葉に從つておくさ。お前は虫取菫だよ。菫は貞節を意味するな。私は虫だね。お前の葉で捲かれて居るのだよ。最う仕方が無いさ。二人の間が離れるの如何のといふ事は無いといふ樣に極めて置かんと……』

種女の腕が投出されてある机の上。其所に伏せてあつた赤皮の洋書、博士の手が觸れて下に落ちると、押潰された蝶花が散つて出た。

《二十一》

姉者人の說に從ひ、今までの自然主義を排し、教育の蒔直しを爲ると極つて見れば、それと一階級を畫する前に、氣を拔いて、それから愈々心を緊めて行くのが好からうと、博士は授業日の繰合せをつけて、中に挾んだ日曜日ともに三日の休養。夫人を伴つて大宮公園に遊んだ。

鐵泉宿の離座敷。赤松の林、青芝の原、世界は唯二人、新婚旅行と見たら必らず此所へ通すといふ一室、其所へ博士夫婦は入れられたのである。

これから越さねばならぬ山坂を前にして、麓の水茶屋で足を休めた旅人の、それが種女の心であるのだ。

折柄濃霧咫尺に迫り、如何なる山の嶮しさか、如何なる坂の急なるか、旅客の眼に映せぬ時には、扨て其想像がどんなであらうか。實體以上に思ひ遣られて恐ろしの山や坂や、心は心ならぬべき筈。

どの樣に幽邃の地であらうとも、どの樣に閑靜な家であらうとも、其所に誰も居らず、別して小姑が居ないからとて、種女の心は毫も休まらぬのである。

氣を拔く爲ではあつたが、それよりも深く考へる爲のやうになつて了つた。生花の稽古が自分に出來るだらうか。茶の湯の稽古が出來るだらうか。今までの身の持方が悉く良くないとて、謹めといふ其誤り方は、如何したら好いのであらうか。お牧婆ァさんに對しても、錦やに對しても、亦ケンに對しても、あれでは甚だ能くないとある。如何いふ樣にしたら好いのであらうか。一々は其時

折に、糸乃から注意するとの事であるが、それ程今までの自分が惡かつたとすれば、何故旦那樣が今までに、呵つて、直して、下さらなかつたらう。戸隱に居た時には自分で自分を審めるでは無いが、智惠の足らぬ方ではなかつたのだそれが此方へ來てからは——否——姉樣が見ねてからは、箸の上下しまで違つて居るとか。

迚も東京に住居して名ある人の妻として世の中に立つのは、自分の身に着いて居らぬのだから、故郷へ歸らして下されと言出せば、それは成らぬと良人は引留める。其引留める良人の心を汲めば、嬉しき極みの、それが爲に、强て振切れぬ袖の露けさ。如何しても此所で水の瀬を變へねばならぬ事かと、思へば思ふ程種女は沈み勝で、博士の心地よく麥酒を喚ぶやうには、迚も連添うて行れぬのである。

『種さん、鐵泉にも飽きたし、麥酒にも厭氣がして來た。散歩しやうかな、其邊を……』

と博士は勸めた。

『行きませう』

と種女は答へた。

『何方に仕やうかな』

『何方へでも……』

種女は博士の行く處へ行く。必らずしも地を選ばぬのである。

《三十二》

紅葉の下に丹塗の社殿。其影が池水に溶けたか、と見れば、緋鯉、鮒に集うて跳ねるのであつた。

正木博士と種女夫人とは、紅葉の下を出で、社殿の前を過ぎ、緋鯉の上を越して、苔深き石燈籠の間を潜り、枝繁き杉の大樹の下を縫ひ、池と沼との間を劃する堤の上を歩して、芝原から松山に登り、それで世界の一週を終つた。此上は本の旅館へ還るのであるが、未だ興が盡きぬかして、岡つゝきの松林、二人手を組んで行かれるだけの路を擇んで、行けば行く程松多く岡長し。振向けば

來し方も松。先き手の方も松。右も松、左も松。松と松とは、根を搦み、枝を連ね、或る根は蔦かつら、或る枝は蜘蛛の巣、搦める上に搦み合ひて、連なれる上に連なり合ひて、離れまじの景色。二人はこれを見た。

有るか無しの風にはあれど、四圍の松に音あり。寂しからずとせんや、ではあるが、久しぶりで種女は、深山幽谷の趣味の自然と身に沁みて居たのを呼起した。此所の景色の似たとにはあらねど、何となく戸隱の可慕しき心から、今の吾身の世に住み心惡しきに思ひを通はし、故郷へ歸るなんど言出してはならぬと、良人からあれ程言聽かされたのにも拘らず、つひ、元の草を刈つた時を懋しがり、それからそれと考へが渡らうとする刹那。

『種さん、お前は如何したのだなア。如何も此方へ來てから浮立たないねい。何か又考へてるんぢやァ無いかな』

と博士は問を發した。

『いゝえ……何んにも……』

と種女は答へたが、餘程曖昧な調子であつた。

『然うぢやあるまい、何か考へてるのに相違あるまい。若し、お前、此間内からの事を考へて居るのだと、それは不可よ。何も彼も忘れる爲に此處へ來て居るのぢやァ無いか』

『然うですけれど……』

『けれど、ぢやァ、如何も考へてるのだな。不可な、如何も好く無いな』

博士は搔込むやうに種女の手を取つて。

『種さん、お前はねえ、何もねえ知らんのだねえ。何アんにも知らんのだから困るよ。や、それア、何んだよ、姉さんの言ふやうに、家事向の事を何んにも知らんといふのぢやァ無いよ。好にかな、お前は、私が、どの位お前を愛して居るといふ事をだ……それを知らんばかりぢやァ無い、愛といふものが、どの位貴いかといふ事を知らんから困るよ』

と聲に力が――取つて居る手にも力が一杯入つて居る。

『知つて居ますさ……貴郎が妾を可愛がつて下さるのは、能く知つてますさ』

『知つとる？いや、知つとらん!!!な。お前は、此間あれ程言つて聽かしたのだが、最う戸隱へ歸るといふ樣な氣を出すな。草刈が身にあるといふ樣な氣を出してはいけませんと、斯う云つた。それをだね、未だ本統に呑込んで居ないやうだよ』

『……ですが……』

博士は耳にも入れず。

『いけません〳〵然ういふ心が有つては、未だ私の愛の、どの位であるかといふ事を知らんのだ……今、改めて云つて聽かして上げるよ。私がお前に對する愛の度といふものは、非常なもんだよ。それであるから、お前も其つもりで居て呉れなければ成らん。今、お前が戸隱へ歸つて御覽。正木の面目は丸で潰れて了う。や、其譯も序に話して置かうが、私は學術の爲に丸で世間を見なかつた時代から、續いて、愛情の爲に丸で世間を顧みぬ時代があつたそれだよ』

（二十三）

博士は空を仰いだ。松の枝にわなゝきを認めた。種女は首を垂れた。松の根の動ぎなきを見た。

『それだよ。種さん。世間で何と言はうと、一向頓着無しに、私はお前を妻にした。それが則ち愛の度の非常なのを示して居るぢやァ無いか。であるから之をお前が顧みずして去つたら、お前は私の面目を潰す事になる。面目を潰してもお前と夫婦になるといふ事は厭はなかつたが、夫婦別れをして面目を潰すのは、如何しても厭だね、分つたかな。だから、最う微塵も然ういふ心は失くして了まつて、好にかな、何處までも私の妻であると、斯う極めた心から、何んでも辛抱して呉れなけれァならん。姉さんが細少した事を喧しく言はうとも、私は大體に於て、私がお前を愛して居るといふ事さへ知つて居て呉れたら、少々の過失は咎めないよ。今度のやうに正木直輔の頭腦で、學問以外の事を深く考へさせる様な事を、最う〳〵爲せない様に……分つたかな。好にかな』

斯く聽いて見ると、如何しても種女は、戸隱へ歸らうといふ氣を出す譯には行

かなく爲つた。

父もなし、母もなし、伯父はあれども遠し。心細い其中に良人は斯うまでも吾身を可愛がつて呉れるのか。宛然薄い硝子の器に熱湯を注ぐ時のやう。恐る恐る此方の胸に彼の人の眞情を注ぎ入れ、或場合では、女皇の膝下に跪く臣下の如く機嫌を取られる。此所を思へば姉なる人が、如何に邪慳に當ればとて、義理にも去らうとは言はれぬと、涙含むまでに强く感じて。

『最う妾は、何處までも貴郎の傍を離れません。妾は……貴郎が崖からお落ちなさつた時に、妾も一處に飛降りたやうに……』

『おう種さん……』

松ヶ枝は松ヶ枝と搦み、松の根は松の根と連なつて、蔦かづらの結び足らぬ先を、蜘蛛の糸が又繋いだ。

○　○　○　○　○　○　○　○　○

松の境を出で、尾花の境に入つた。茸など採集しつゝ博士夫婦は更に萩の境に

と分入つた。

空に雲無し、晴れて小鳥わたる。心の曇り全く散じたる二人は、楽しき限りを極めんとて、野萩咲ける野の限りを見まく進んだ。

萩の中に動く物。尾花の穂の風にもれる、それが。野の中に呟く物。小川の水の堰にかゝる、それか。

（二十四）

岡から續く野。野から起る岡。松林を出れば、芒の野。其所を離るれば、萩の原。世界は之に限られて、唯二柱の神さまよへる、と思はれて居たのが、萩の中に尾花の穂の靡めき、野の中に小川の水の響く、其所に、小唄口ずさみつゝ一人の若者、枯草の上に踞して寫生帖に筆を走らす姿。博士と種女とは見出した。

畫中に入來るは、野犬か、山鳥か。烟管を啣へた百姓殿、にあらずんば銃獵家とばかり思つて居たのが、眼前に博士夫婦の立現はれたのを見て、畫家は驚いた。

博士夫婦も此所に斯うして畫家の居やうとは思はなんだので、横に曲る路を取るさへ忘れて、立留つた。

更に意外であつたのは、畫家が帽子を取つて、笑を湛へた挨拶の次ぎから。

『や、御散歩で御座いますか。正木先生!!』

と聲を掛けたのである。

名まで知つて居られたので、博士は吃驚した。種女は學校の方で知つて居る人かと深く怪しまない。

『貴郎は……何方でしたかな』

博士が問ひ掛けると。

『へい……私は……』

と云つて忙がし氣に寫生帖の端を破つて繪筆を走らして『溝谷靜男。號千花』と記し、これを博士の前に捧げながら。

『私は、あの、栗島や谷田の友人で——で御座います。いつか目黒で餘所ながらお目に掛つたので御座いますが……』

『は、はア、然うでしたか』

と漸く解つた。

『や、實は先生が昨日から、千松園へお出での事は傳聞致して居りますので。お伺ひ致したいとは存じて居りましたが、餘り突然參りましても失禮と存じて……今日は斯ういふ所で機會を得まして……私に取りましては誠に幸福です』

『いや如何致しまして……たしか私は貴郎の繪を拜見した事があります。初對面といふ譯でも有りませんな……ねい、確かに見ました。青年畫會の展覽會で。あゝ然うでした。秋草をお畫きなさつた。大層結構でしたから記憶して居りますよ。矢張私等は、繪を見ても、人物よか花鳥の方が趣味があるやうに考へられるですな。動植物の學術眼で美術品を見るのは餘り好くは無いのでせうが、如何しても然うなるですなア。はゝゝゝ』

『いや、それが結構なので。矢張それ〳〵の專門大家の眼から批評して頂かないと、いけないので御座います』

『今日は萩の寫生ですか……』

『いゑ、何、別に……』

『貴郎は、どちらに御滯在ですか』

『矢張、千松園に……私は母屋の二階に居りまして……ちと依頼された物が有りますので、五六日此方に居ります』

『あゝ然うですか、私の部屋は別に隔離して居るもんですからな……如何かお遊びに入らッしやい。私達は明日一日居るつもりですから』

『難有う御座います。是非お伺ひ致しまして植物學上からの御注意を願ひたいつもりで……』

『いや、それは又餘り難かしい事ぢやアありませんか……それよか貴郎、碁は如何ですかな』

『打たん事も有りませんが、極へボイので』

『それア好ゐですな、へボイ同士で面白いですな。お待申して居ます。お歸りなさッたら入らッしやい。や、お邪魔致しました』

博士は種女を促がして更に萩の中に進まんとした。種女は繪を畫く人を初めて見た。其寫生帖が覗いて見たくて仕樣が無かつたのだ。溝谷は横目で夫人を見送つた。

《二十五》

其夜溝谷は離座敷の正木博士を訪れた。

博士の方からは極めて淺い所の植物談が出た。溝谷の方からは又同じ定度の畫談が出た。結局圍碁に落ちて、ツカミで溝谷が黑と極つた。地取りから、ぽつり、ぽつり。博士は無闇と卷莨を燻らし、膝の上は灰だらけ。夢中で打つから中々早い。溝谷は、腮を撫でたり、頷を擲いたり、考へては何か文句を並べ、石飛んで此碁に勝たずなんかん。お定まりの口癖を言つては悠然たり。種女は一人燈下に悄然。五目並べも知らぬ身の、圍碁の趣味は勿論解せぬので詰らなさが去み〳〵と肌寒し。今朝から三度も浴した温泉ではあるが、此所に斯うして居やうよりはと、つひと立つて手拭を取れば、目敏く見出した溝谷。

『やァ奥樣。お風呂ですか。さぞ御退屈でせうが、好きな道で、つひ如何もお邪魔を……』

などお世辭を打込む餘宥がある。博士は少々血眼で、種女の方には心着かず。

『如何も此所を切られては不可ですな。やッ如何も何時の間に斯う爲つたか更に分らずぢや。兎も角も渡るかな』

根元まで卷莨をすッぱ〳〵。

『い〳〵ね……御もッくり……』

種女は言つた。口では斯うだが顏は然うではなかつた。

『お氣毒さまで……』

溝谷の言葉は兩方へ掛つた。

『おや〳〵、此方の石も危いかな』

博士の駑軍、左右の翼が共に不利だ。

『お氣毒さまで、はッ、はッ、先づこれ丈は頂戴出來ましたね』

『これを差上げては甚だ困るですな』

『其代り此方が大きう御座いますよ。や、奥様、途中が暗う御座いますよ』

両方へ氣と詞とを配つて居る。

『だって、これを取られては、私の生命が無い……』

『それを取つて見たいのが私の癖で……』

其内に種女は行つて了つた。

彼一目、此一目、逃げる、追ふ、取る、繼ぐ、跳ねる、覗く、劫は御免だ。どっこい翼鳥だ。最一ッ延びる。今度は下駄か。打込んで鶴の巣籠りとは恐縮な。

ど、駄目の無くなるまで打つて、結局十何目博士の勝。さかし、わざとらしい繼ぎ落しを二ヶ所までした溝谷の手には心着かぬ。

『如何しても貴郎が白ですな。殘念ですけれど仕方が無い。最う一番願ひませう』

わざと奮激した語調は溝谷の口から。

（二十六）

ほく〳〵博士は喜んで。

『最う一番ですか。遣りませう。や、面白いですな。然う貴郎とは違はんのですが、今のは少し私の方が好かつたですな。さア、最う一番』

最う一番。最う一番。種女が湯から歸つて來ても、未だ遣つて居る。種女が歸つて來てからは、一層溝谷が敗が籠んで來て、散々である。

『最う止しませう。如何しても勝てませんよ。それに遲くなりましたから……』

『嫌、如何も奥様、御迷惑で御座いましたらう。これが爲めに何方へ參つても評判の好く無い男なんです。はゝゝゝ』

碁石入の蓋をして溝谷は言つた。

『いゝね……』

種女は斯う云つても、例の不興顔で、先へ既に寐間衣と着替へて了つて居る。

『やァお前は最う寐る支度なのだな。先きからお茶を入れて貰はうと思つたんだが……』

と博士は勝つて嬉しいので呵らぬばかりでは無い。例の放任主義の終局として

別に小言も云はぬのである。

『妾、湯に行つたもんですから……又衣服着替へるのも面倒ですから……寐間衣着て了つたのです』

『それならそれで宜しいが……やア溝谷さん、御免下さいよ。すべて此通り保養中は、何も無禮講です。それで無いと遊ぶ氣が爲んですからな』

『其通り!!!それに違ひありませんな。氣が置けてはいけません』

『然うです、勿論ですな』

と言つて、自分で床の間から白葡萄酒の壜と洋盞とを持つて來た。種女は唯それを見て居る。

『如何ですか、一杯、如何ですか』

『いや、私は一向……』

目黒ではへゝつた人の言である。

『然うですか。御遠慮では無いのですか』

『本統ですが、餘り何んですから、少し頂戴を……』

『葡萄酒ですから、そんなに醉は仕ませんよ』

『いゝ、それに、又遲う御座いますから、いづれ又明日……』

『あッ明日又一ト戰爭……私は滅多に遣りませんが、始めると又止められない質で……妻が來ない內は如何かすると、寺の和尙が來て徹夜して打つた事なんか有りましたよ』

『いづれ御宅へ、例の植物上のお話を承はりに伺ひたい考へで御座いますから其節又お閒を見て願ひたいですな』

『あゝ、それですな……貴郎に今日斯うして御懇意に爲つたのは、極好いです貴郎にお願ひしたいですがな。私は、その、植物の花に就て實は著述に掛つて居るです。早晩公けに仕たいと思つてるですがな、其挿畫を如何でせう—これは如何も多少植物學の頭腦がある人で無いといけないのですから、貴郎がそれ程御熱心なら、恰度好いですな、其挿畫を願ひたいですが……』

『私でお閒に合ひますなら、何も修業の爲ですから、喜んで畫きますよ』

『結構だ。これは好い方と御懇意に爲つた』

博士は獨で極めて喜んで居る。溝谷はかゝる時にも妻女の機嫌を取る事を忘れず。

「これからお宅へ又始終お邪魔に出ますから、如何か何分御懇親に……」

種女は向ふの會釋に連れて、輕く頭を下げたばかり。

《三十七》

入浴。散歩。幾度となく繰返したので、手拭も早や鑛泉に染り、閑境の秋の風肌に馴れて、大宮公園も飽き掛つた。

けれども、今夜歸るのかと思へば、さすがに名殘の此所に惜しまれ、種女は未だ何日までとなく居たい心の、直ぐ色に出て博士の眼にも認められ、學校さへ無かつたら、實は自分も唯譯はなく、此處に斯うして居たいのであつた。

林の隅、野の端、足跡到らざるなき博士夫婦でありながら、母屋の二階へ登つたのは之が初めてゝある。

「さァ如何ぞ此方へ……散らかして居ますので甚だ失禮ですが……」

出迎へたのは畫家の千花。軒から覗く松ヶ枝の蔦紅葉。座敷の内にも繪具皿の朝日にまばゆし、枠張の絹地に今樣美人立つて、嫣然一笑、此方へ會釋。

「やァお邪魔しちやァ不可ですが、一寸拜見に來ましたよ」

博士はずか〳〵と座敷に通る。種女は溝谷よりは美人畫に目を配つて、襖の閾の上に立つて居る。

「まァ奥樣、此方へお這入り下さい。繪師い室くらゐ亂暴なものは有りませんので……」

言ふ内立つて、電鈴を押す。赤ら顔の女中が來る。座蒲團。煙草盆。茶。菓子女中去る。博士坐る。溝谷は種女を招じて座に着かせる。

「見事に出來て居ますな。中々美人ですなァ」

と博士は繪を賞める。

「本統に綺麗な方ですねゝ」

と種女も言ふ。

「如何致しまして、奥樣其儘に美しく寫されると好いのですが、先程來た女中

に似て居るですから恐縮です。いくら骨を折つても、頓と美人が描けません
ので……」

溝谷は斯う言つて、から〳〵と笑ふ。博士も笑ふ。種女は此位のお世辭なら看破出來るので、顔を赤らめるまでもなく打笑んだ。

「私は美人も結構だが、矢張花鳥の方が好きですな。無遠慮で失禮だが……寫生帖の拜見は出來ませんかな」

「いや、それは構ひませんが。御覽に入れるやうな物は……」

博士の請求に溝谷は頭を掻きながら。

「何も別に御覽に入れるやうなのが御座いませんけれど……これに少々有ります。人物も混交つて居りますが……」

と取出したのは、厚紙で表紙を取つた磐水引の美濃の摸綴二三冊。

「奥樣も御覽下さいますか。甚だ汗顔ですねに」

と又指の先は髮の毛を分ける。

博士と種女とは、手に取つて、寫生帖を見て居る。突然博士は畫家に向つて。

「これに有ります。こら、生花を稽古してる寫生ですな。此生花の先生は貴郎の御懇意な方ですか」

と問ふた。生花といふ辭で種女は自分の方のを捨て、良人の手にせる方を覗いて見ると、花の枝を手にせる婦人。鋏を手にせる少女。

「へゝ……それは、何んで……極、その、何んですよ、懇意に致して居る人でなァに、極、つまらないのです。其次ぎの頁には鷄冠花の寫生が有ります」

と何故か急込んだ。博士はそれ處ではなく。

「や、これは妙だ。實は溝谷さん、妻に生花と茶の湯と稽古させやうと思つてるですがな。一向其方は不案内で、何處へ遣らうか未だ極めんで居るですが此畫中の人は敎へて呉れますかな」

溝谷は思はず膝を打つて。

「へゝ、ゝ〳〵、敎へますとも、喜んで敎へますよ。茶の方も兼て居ます。古流州流で、秋月庵の肚中です」

（二十八）

頗る滿足で、博士は種女を顧みながら。

「恰度好ねちやァ無いか。花も茶も両方教へる先生を溝谷さんが知つておいでなさるんだから……」

種女は氣の無い調子で。

「然うですね」

と答へたが、それよりは寫生帖に面白い繪がある、其方を復た繰つて見始めた。

「正木先生」

溝谷は茶を、ぐつと呑干して。

「それに何んで御座いますよ。其師匠といふのは、お宅から然う遠く有りませんが。白山下ですから、譯は有りませんですよ」

「白山下なら、それァ近いですな」

といよ〳〵願つたり適つたりだ。

「本名は白濱袖子と申すのですが、花の方のは何々庵とか申ましたよ。其他琴曲も一通りは達して居ますので、弟子も澤山有ります。私は其弟子の内の有志家に繪を教授しますので、それで始終出入して居りますが、袖子といふ人は實に感心な人でして、如何しても明治烈女傳中の一人ですな」

と溝谷は言葉に力を入れて譽立てた。

「それァ猶更以て好ねですな」

「先年日清戰役の際に名譽の戰死を遂げた、白濱中尉の未亡人ですが。今日まで僅かでは有りますが、遺族扶助料は其儘手をつけないで、自分獨立で生活して居るですからな。いね、他に何も無いのです。下女を相手に二人切りですが、それァ如何もお弟子に對しても親切でしてね、奥樣が入らつしやるには、此位適當な家は有りますまい」

「それァ好ね。それに極めたいですな。御歸りでしたら御紹介を願ひたいですが……」

「私が奥樣のお伴して先方へ參りませう」

「いや、それでは恐縮します。なに、御紹介さへ仕て頂けば、私が連れて行くですよ」

「……なに、貴郎、私の方は一向構ひませんから、私が御同伴を……ねね、奥様、旦那様がお出でなさるまでの事は有りませんわ。私が一度御案内申したら、直ぐ家もお分りになりませうし、それに何んで御座いますよ、直き又御馴染になりませうから……」

種女は默つて居る。

「いや、一度は私も行つて種々御依頼申しとかんと成らんです。妻は實際、何も丸で知らんですから、能く先生に打明けて願つて置かんと不可ですから……」

「左様ですか」

「如何か御紹介だけを願ひたいですな」

「左様ですか……よろしう御座います。けれど、私も直き又東京へ歸るのですから……や、斯う致しませう。私から手紙を先方へ出して置きませう」

「然う願へれば結構だ。や、萬事これア好都合だ。種さん、溝谷さんに此上何分にも御願ひ申しますと、能く御依頼申したら好にちやろう」

「よろしくお願ひ申します」

と切つて張つたやうに挨拶。

（二十九）

夜、東京に入るのは、樂しき旅を結ぶ人の秘訣では有らぬ。

終列車で上野へ歸つた博士夫婦、留守にしたのは三日ではあるが、三月も潛らなんだと思はれる我家の門に、俥の梶棒を着けさせて、先づ聽くケンの吠ゑる聲。

「旦那様がお歸りだよ、皆んな居睡りでも仕て居るのかね」

と姉者人の尖り聲。

最う胸が一杯、延びた身の筋が又縮むかのやうに種女感じて、玄關に脱ぐ下駄の離れがたな。

洋燈の心も出過ぎては無駄だと、細められた光に座敷暗く、不用心とて締切つた雨戸から襖、室内に悪氣籠つて、強度なる温室に入つたかの樣。

錦やは病人の如く元氣なく、お牧婆アさんは死人の如く活氣なし。姉者人一人潑々として、厭味と小言と上下に蒔散らして、溜つた手紙を讀みかけて居る博士に向つては、やれ誰が來たの何が訪ねたの、垣根が風で倒れたの。低氣壓襲來の方針を圖にして見れば、四方八方に矢の先が飛んで居る。

種女は常に戸隱の山を懷ふて居た。

かゝる時には戸隱まで行かずとも、大宮の林に避けたい心。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

白山下の小路を曲つて、突當りの杉垣に沿ひ左に五六歩、格子門に「茶道生花琴曲指南」鏡古庵と檜の木札。別に小さな陶製の標札には「しらはま」と假名文字。

種女を伴ふて博士は此格子門を入るべく戸を開いた。恐ろしい大きな音。鳴子が附いて居るのであつた。

穿物の音高からぬを得ぬ御影の切石、一筋に敷れて、十四五歩の先きに玄關、此所にも亦格子戸。女世帶だけに要害堅固と覺ゐて、此所にも鳴物。驛路の鈴の摸造品？昔の奏者、今のりんと云つた樣な下女が取次ぎて、座敷へ通る。博士は其整頓せる裝飾に目を配つて、今に自分の内も斯ういふ樣に綺麗になるかと思へば、滿更嬉しからざるにもあらず。出來れば好し出來ぬも好し。出來ぬと思つて諦めて居たのが、出來る端緒を今日開くと思へば、自分まで弟子入が仕たい位。

種女は九頭龍の神前に人身御供にでも上つたかの樣に考へて居る。ふるゐさうなのを耐へて、座布團を距る約一間。博士の肥大の背後に接する二三寸。戀象石の後に雛菊の咲くに宛如たり。

去づ〳〵と出來る茶湯生花琴曲の師匠、陸軍中尉白濱氏の未亡人袖子、切下げ髮に櫛の齒立ちて、一毛亂れず。色は淺黑いが、白粉の粧ひを假らず、細身に被布の似合好く、去とやかに禮をほどこして。

「如何ぞまアお進み下さい。貴女、如何ぞお敷き下さいまし」

と種女に座を與へなどして。

これから溝谷より、紹介狀の先きに達したる事。茶湯生花、直きにお覺えになります。極意、奥儀の何んのと、これを以て身を立てる人でないならば、左程むつかしく言ふに及ばぬなど、草に碎けて語り出で、必ずしも古流に泥まず、新しき思想ほの見へるので、如何にも之は軍人の未亡人。明治烈女傳中の一人と、博士大納得。此人に最愛の妻を託するは幸福なりと、實情を委しく語りて何分よろしくお願ひ申すと、博士依頼の口上の間、種女は無言でいつまでも首を垂れて居る。袖子は、博士の心を酌んで種女の姿を見て、此枝をためるには一ト工風。

(三十)

初めの内は一人でも行かれまいと、錦やとお牧婆アさんとが隔日に種女の送り迎ひ。白山下の白濱の門に入つて見ると、それは〳〵師の袖子の親切。衆乃の底意地悪きにくらぶべくもあらず。難かしい事かと思ひの他、花も茶も手輕なもので、此分なら二月三月で、一通りは出來さう。これよりは、朝から晩まで何かは無しに口小言云はれる、家の切廻しの何とやら、其方が種女には呑込めぬのである。

博士は學校。種女は今日も白山下へ通ふべく、お牧婆アさんと一處に家を出る。

「ねね、奥樣。妾がお伴をして參りますのも、最う今日位なものですよ」

と、ケンまでがお伴で附いて來る。手にして居る桔梗にじやれさうで危い。

「あゝ然うねね、最う妾も一人で行けるからねね……」

と種女何心無し。

「いゝね、然うぢやァ無いので御座いますよ。妾はお暇を頂戴するつもりなのですよ」

「まア……如何して……」

と種女は驚いた。

「如何してッて、貴女、考へて下さいましよ。餘んまり馬鹿々々しいぢやァ有

りませんか。妾だッてこれでも東京ッ子で御座いますよ。そみッたれな細工なんざァ憚りながら仕た事が無いので……それのに、妾が貴女、旦那のお姉様が見ねるまでに、好いやうな事をして會計をくすねたなんて、いね、口に出しちやァ先様でも仰有らないけれど、それと言はない計りの所置振を爲れて見ると、あんまり好い氣は仕ませんので……』

口惜しさうに辯じ立てた。

『まァ、誰がそんな事を……』

『誰がッて極つて居まさァね』

『お姉様が……』

『然うなんで御座いますよ。馬鹿々々しいちやァ有りませんか。江戸生れの人間で、そんな事を爲る者は一人も有りやァ仕ませんわね。それにまァ第一妾から云はせると、行儀々々と貴女の事を仰有るけれど、彼の方だッて行儀の好い方ぢやァ有りまんよ。田舍ですね、遣り方が皆んな田舍ですね。それァまァ當節では、どちら樣でも儉約々々と、これは如何も致方が有りません、

徳川家の頃のやうにお屋敷だからッて、ばッばッとするてね譯には、これァ如何も行きますまいけれど、然うかと云つて無闇とやかましく云つた日にやァ、却つて何んにも成りませんので、まァお聽きなさいましよ、斯うなので御座います』

と又腰を延して一息して。

『貴女方のお留守の時ですよ、朝から味噌汁は無駄と仰有つて、お止めさ。これは田舍は何處でも然うだから好いと仕ましても、お晝が茶漬の晩が茶漬。いくら妾が梅干婆ァだからッて、友喰ひが續いては恐れまさァね。それから二日目のお晝には八百屋が來ましてね、好い葱を置いて行つたのですよ。それを貴女、白根ばかり殘して、青い葉ッぱを捨てたといふので、包紙だけ取つて中味の祝儀でも無くしたやうに、大小言ぢやァありませんか。然ういふ風ぢやァ今日の拳公人は居つきませんですよ。妾もねね、旦那樣と貴女との時には、本統に結構なお屋敷だと存じてねね、腰が立たなく爲つて使へなくなるまでも、御厄介になるつもりで御座いましたがねね』

（三十一）

お牧婆ァさんの氣焰の續き。

「それに何んで御座いますよ。これも妾に面と向つては仰有らないのですが、錦やには然う仰有つたさうです。お牧は年寄て身體が最う動かない。あんな者を使つて置くのは穀潰しだッて……へッ、あんまりぢやァ御座いませんか妾はこれでも年齢の割には能く働いて居るつもり。いえ、自分で自分の事を云ふのも可笑しう御座んすが、然うぢやァ有りませんか奥様……」

種女は頷いて。

「然うよ。本統に然うなのよ」

「何も貴女、妾には立派な娘もある、婿もある。家へ歸ればこれでも樂隠居ですから、何も御奉公なんか仕なくッても好いのですが、家の爺が存命中、御愛願になりました縁故で以て、旦那様が來て呉れろと仰有つたから、それで參つて居ましたので、なァーに貴女、それ程お役に立たないのなら、お暇を

頂戴して家へ歸るばかしですよ。なァーに貴女、そんな譯の分らない事を云はれて、一時も居るのは厭で御座いますよ」

「だッて、それぢやァ妾が困るぢやァ無いかねに」

種女は實際心細い。

「其所で御座いますよ。貴女様の事を考へますと、お可哀さうなのは奥様だと存じましてねに、それで今日まで參り兼ねて居ますのですが……本統に貴女がお氣毒だ。實に妾はお可哀さうだと、いに、それァ存じて居ますのですよ旦那様もあの通り極好い方で御あんなさるのですけれど、如何いふものですかねに、御兄弟でも、あゝも御氣質が違ふのですからねに……」

と息を切らして汗を拭く。種女は深張の洋傘で其額に射す日の光を遮ぎつて遣りながら。

「婆ァや、そんな事を言はないで、いつまでも居てお呉れで無いと、妾、本統に心細いからねに」

「御無理は有りません、それァお察し申しますが、今も申します通り、妾の方

は居る氣でしても、あの樣子では遲かれ速かれ、妾は首になるのですから、出されるよりは出た方が好う御座いますよ。妾だッて外聞は知つてますから……」

「出すの出さないのッて……旦那樣に妾然う言つて、そんな事の無いやうに……」

「其所が貴女は未だ……貴女よりも旦那樣よりも、唯今では彼の方が、一番厭張つて居らッしやるぢやア有りませんか。それも貴女さへチヤーンとお成りなされア何んにも無いのですから、早く世帶馴れて、何かも御勉强爲さいまして、人に指揮を受けないやうな奥樣にお成りなさいまし。少しも早くお成りなさらないと、本統に御損ですからさア」

といふ途端にケンの足を踏んで吃驚。ケンは高らかに吠ねて、驅拔ければ、最う其先四五間で鏡古庵。

《三十二》

茶の湯とはだゝ湯をわかし茶を立て、のむばかりの本から枝が咲いて、花もあり、紅葉もあり、浦の苫屋の秋の夕暮の景色なんど、思ひもよらぬ白山下の鏡古庵。床の間に箏の立てかけてある後に、月琴が見ねて居る。

けれども庭はさすがに苔深く、道安好みの露地、敷石に三石なく、植込に常盤木。橘寺の古燈籠巧みにうつされ、苔清水の手水鉢好く出來て居る。軒下に明暗よろしきを得たる數寄屋。朱引内として茅葺をゆるさず、それが爲の亞鐵張りには、誰もが興をさまさゝるを得ない。

種女は座敷に茫然として唯一人。初めは作法正しく坐つて居たが、誰も其所に居らぬのみか、餘りに待たされる時間の長いので、横に身をもじり〳〵と、文字摺が衣の裾に出來さうだ。

下女の喜代といふのが氣遣がつて、時々茶をさしに來て見るばかり。見る繪も無し、讀む本も無し。庭の細葉冬青に小鳥が何度來て何度去つたか。金剛纂の葉に日が照つて居たのが、陰に爲つて了ひ。外面に大勢學校戻りの子供の群それも既に遠去つた。

如何にお客様として、餘りに長い。何時まで待たされるのか心細い。お牧婆アさんは暇を取つて去つた。最う行來に馴れたらうとて、錦やも連れず今日から一人來て、其日から直ぐ歸るのが遲れては、又彼の人から何とか言れやう。旦那様も亦御心配であらうのに、如何したら好い事ぞと涙含むまでの思案。

一層お師匠様がお留守といふなら、未だ歸るべき潮もあるのに、悠ゐ數寄屋にお出でだけに、歸るに歸られぬ此有様。

庭傳ひに行つて見やうか。

悶へるばかりに待ちあぐみ、先頃までの種女なら、ずか〳〵と露地下駄を突掛けて行つて見るのを、吻を知るは臆病のはじめ、それを得せず。爪と爪と相摩して見て、指と指と組合せて見て、手と手と握り合せて裏返へしにして突出して見て、袂と袂と膝の上に重ねて見て、矢張り如何しても退屈で〳〵。

やうやく庭石に下駄の音。

見ると、袖子が、數寄屋から出て來たのである。

櫻柳の枝にでも撫でられたのか、切下げ髪の少し亂れて、顏に夕日が射したのか薄紅。捨石の傍で危くつまづき掛けて、立留り。

「まア、正木の奥様、其所に入ッしやッたのですか。何故まア喜代が知らせて呉れなかつたのでせう。ちッとも妾存じなかッたので御座いますよ」

(三十三)

符が合はぬ。下女の喜代とやらの言ふのには、誰も數寄屋へ來てはならぬとの嚴しい命令であるから、お氣毒だが、彼方から、出て來るまで待つて居て呉れとの事であつた。それを袖子は、何故喜代は知らせなかつたらうと逆捻。これや天地人外の鈌の入れ方、ちと可怪しいと種女は考へた。

袖子は座敷へ上つて、座り込み。

「本統にまア濟みませんで御座いましたねね。つひ、貴女……今日は茶の湯の方のお弟子で、あの、矢張、あの、貴女位の方ですよ。其お方に口傳を致して居りましてねね、いね、最う直きて御座いますよ。貴女は御記憶が好くッて居らッしやるから、直きに奥儀をおゆるし申してもよろしいですよ……ま

ァ貴女、お敷きなさいまし。壁の上では冷へますから、妾も此通り御免蒙りますよ」

と能く辯じる。それだけ種女は默して居て、お辭儀だけで受け答へて居る。

「あの、喜代、正木の奥樣にお茶をさし上げたのかね。あッ參つて居ますね。ちやァ、あの、妾に、一寸お水を一杯持つて來てお呉れな」

喜代は盆に載せて大洋盞に水一杯。

「あゝ如何も……喉が如何したのか、から〳〵して……」

茶の湯の師匠にも洋盞の水の手前は無いかして、一息三口ばかりに飲んで了ひ

「あゝ、これで好い心持……さァ今日は、花の方を此方で御傳授致しませうか……」

種女は少し考へて。

「あの——今日は……又明日伺ひませう」

と極り惡氣に言出した。

「おや、然うで御座いますか」

琴の義甲を佩めるやうな指つきをして。

「それは折角入らッしやッたのに、如何も飛んだ失禮を致しましたねね」

と氣毒がつて。

「喜代が本統に氣が利かないもんですから、致さなくッても好い事を、時々這んな失禮を致すやうになるので御座いますよ」

「いね、あの、何んでも御座いません。又明日……」

種女の方からも氣毒がつて、向ふを氣毒がらせぬやうにと思つても、言ふ事を知らぬ。結局明日はお早くお出でなさい。參りませうで辭して去るを、送出した袖子は玄關で、後からつぐ〳〵種女の髮を見つゝ。

「奥樣、貴女は何時でも束髮で居らッしやるが、そんな好いお髮を勿體ないちやァ御座いませんか。妾のやうに成つては最うお了ひですから、今の内に丸髷にでもお結ひなさればよろしいのに……」

束髮は博士の好み。自分は丸髷が未だ羞かしい心。

「いゝね、妾の髮はいけないのですが、先生のは本統に惜しう御座いますねね」

『なに、妾なんざァ最う貴女、仕様が有りませんですよ、男子も同然で御座んすからねね』

種女は挨拶仕やうとして、不意と壁に掛けてある、帽子と外套、それに眼を注いだのである。

數寄屋の内のは女の御弟子ッ！はて不思議。履脱ぎの下駄までが男子穿きだが……。

(三十四)

利休數寄屋の四畳半、何事ぞ爐の焼口釜で酒の燗。

畳込みの食卓を持込んで、上には鰹の湯焼、重箱の蓋には竹串が算を亂して捨てゝある。玉子の殻に卷煙草の灰をはたき落しながら、酒臭い烟を吐く溝谷千花。小さな辭で。

『……あゝでもなァいイと、四畳——半ァん。湯のたぎるより、音もなく。あれ、チゝチン、聽かァ去やァあんせ。ほいと來た、ね、まァあゝ、つゝーの

チ風ァーせ。朝のお菜は何んにしよか、矢張りいつも苞納豆!!!納豆屋さん。こら〳〵だ』

猪口を、ぐッと乾して。

『あゝつまらない、廻し部屋でヤケ呑といふ形だ』

にじり上りから、片膝かけ、すべり入りの窮屈を避けて、障子がらり。

『氣樂だねね、一人で騒いでるよ』

袖子が入來つた。

『下駄の音が仕ないから、未だ母屋だと思つたら、何時の間にやら數寄屋入りとは恐入りだ』

『何をして居るか油斷が出來ないから、密つと覗に來たんだァね』

『一人ぢやァ何が出來るものか。茶杓で耳の垢を取らうとして、失敗したのと服紗で汗を拭いたのと、御覽の通り釜の湯で酒の燗をして居る位なものさ。極、音無しく番をして居たね。御褒美に何か頂戴。あッさりしたものは御座なく候か』

「心得たもんで、野母の鰹に、天王寺蕪の千枚漬、お前さんのやうな人に食はせるのは惜しいよ」

「何んでも惜しがる人だね」

「當前さ、お前さんの樣に、ッャミ喰の好きな人には、用心仕ないとねゑ」

「ッャミ喰ひをさしましたかい。へん、女弟子の内で目をつけたのが有つても終始眼張つて指一ッさゝせない癖に」

「其筈ですよ、大事なお弟子にね、萬一の事が有つたら大變ですからね」

「お弟子思ひのお師匠さんか。まア何しろ一杯……」

「綺麗に乾したのか知ら……」

「疑ぐり深い人だな」

「性分でね」

「好く無い性分だ」

「直して下さい」

「其枝ぶりぢやア鋏が入れられません」

「最う姥櫻でね、お氣樂さま!!!」

「おや、お氣に障つたか」

「如何でも好いから酌でもお仕なさいよ」

(三十五)

袖子は猪口を下に置いて。

「それァ然うと、今、極りの悪い思を仕て來たのよ」

「如何して……」

千化は問うた。

「彼方へ行つて見ると來てるんだよ」

「誰が……」

「お前さんの紹介で來始めた正木の奥さんがさ」

「正木の奥さんが……や、然うとは知らなんだ。如何したの、最う歸つたの」

「胡麻化して歸さうとしたら、向ふも急ぐと見ゐて、先きから切出して歸つて

行つて了つたよ」
「惜しい事をした」
「何故惜しいの」
「だッて、逢ひたかッたので」
「逢ひたかッたとは恐ろしいね、お前さん又悪戯でも仕る氣ぢやァないの」
「其所は分らないので……」
「仕樣が無いねね、性悪るで……」
「おい〳〵僕の羽織を如何するの」
「其所まで手が届かないから、代りにッチッて遣るの」
「痛いよ、其方が。質の價が下るからね」
「何んて下等な事を言ふのだろう。それで給師樣だから恐ろしい」
「それで茶の湯生花琴までのお師匠樣だから恐ろしい」
「馬鹿にしてるよ此人は。毆つよ」
「喧嘩するのなら止さう。遊ぶつもりで來たんだから」

「仲なほりにさァ一ッ上げやう」
「酒も好いが、肴に面の皮の千枚張といふのを貰ひたい」
「千枚漬だよ」
「どッちでも同じ事だ」
「其口調だと、野暮の獨身を呉れッてんだらう」
「野母の鰻の地口でげすか」
「お前さんなら言ひさうだといふ事さ」
「然うでもない……」
「だがねね、串戯はヌキにして」
「串戯がヌキならこれから眞面目に浦燒でも食うのかな」
「交ッかへしちやァいけないねね」
「燒が通らんかも知れない」
「如何で燒くのだよ、これから黒焦に燒くんだよ。ねね溝谷さん、お前さん、あの正木の奥さんに就て、何か謀叛でも持つてるのぢやァ無いかね」

『むにや〳〵〳〵』

『胡麻化すと承知仕ないよ』

『滑稽は矢張り伊勢利が好いねゑ』

『本統に此人は酷いねゑ、捕捉點が無いんだよ』

『饅だらうぢやァないか』

（三十六）

雀の大一の丸髷。種女は手づからの束髪を止して、髪結を家へ招く事にした。合せ鏡で初めて其出來を見た時には、掛けた手柄よりも赤く顔を染めた。種女の境遇が一變する毎に、其メートルとして表はれるのは誠に此の髪の結び方である。

衆乃は頗る滿足で、束髪よりはどの位上品なか知れませぬと喜んで居る。けれども、切下げ髪の師匠袖子が、紹介して寄越し始めた、女髪結のお大なる者が如何なる者でといふ事から、何故袖子と怨意であるのかといふ事に就ては、少

しも考へる處あらざつた。初めて髪を結んだ日に、祝儀を遣る注意などは、勿論無い。種女も亦それを知らず。唯、髪結錢だけ遣れば好いものと心得て、氣を付けなんだ。獨、錦やが知つて居たけれど、お牧婆ァさんでも居たら言出したらうが、別に、お遣んなさいとも何とも言出さなかつた。

お大といふ女髪結、松前節を唄つて女力持にでも出さうな身體であるから、一筋の毛ですら大象を繋ぐと云つた女の黒髪、それを手の内に引攫むに何んの苦も無し。根に強き元結の締方心持好く、前髪の取り樣、鬢の膨らし樣、中々以て巧いものであるが、梳手も遣はず唯一人、消毒函をぶら提げて、呼びに遣れば大概何日でも來る。餘り得意の無い樣子。これも衆乃が研究して見ねばならぬのだが、空々寂々。

それも、去かし、永く髪結を出入らせる存念でないからでもあらう。自分は相變らず獨で小半日も掛つて、小さなおばこを盆の窪の邊に結んで載せて居る。種女にも早く自分で結べるやうに成れとの謎の題として出されて居るのだ。博士は安心して、此頃では『花』に關する著述に熱し、相も變らず研究室に閉

籠つて居る。それに關係して溝谷千花が、毎日のやうに訪問しに來る。さかし溝谷にも粂乃が可怖いかして、勝手へ挨拶に來ても直ぐと行つて了うのである。紅茶の代りに此頃では、薄茶を博士は呼ぶやうに爲つた。ぶつ〳〵澤山泡立たずの茶を、田代で知らぬ相馬燒の茶碗で飲まされて、それでもほく〳〵喜んで居る。

これで正木家は表門の楠の枝も繁り葉も榮ね、目出たし〳〵であるべき筈。

《三十七》

花の稽古日。種女は早咲の水仙を持つて鏡古庵に往つた。

喜代が出て來て、先生は本日お留守で御座います、と斷わつた。

それでは、いづれ明日參りませうと行きかけるを、慌だしく出で來て留めたのは、溝谷千花である。

『正木の奥さん、まア、お待ちなさい。今日は私が居りますから……』

と聲掛けた。

『あッ溝谷さんですか……今日は家へお出でぢやァ無いのですか……』

『參る意であつたのですが……急に用事が出來まして、此方へ參つて居るのです。まァお上んなさい、袖子さんも最う歸つて參られるでせう。それまで私が御傳授申しませうから……』

否むに餘地を與へず。自ら師の代理顏して、庭口から種女を廻はらせ、茶の湯でも無いのに數寄屋入り。仔細らしく鋏を手にした千花が、にこ〳〵顏で前へ座つた。

『私の流儀は、少し違ふかも知れませんよ』

『それぢやァ貴郎は先生のお弟子では無いのですか……』

不審顏で種女は問うた。

『此道は結局、どの流儀も同じなんですよ。たとへば此鋏ですねね』

ちよき〳〵音させて見て。

『これで、木の枝を切るのも、女の髮の毛を斷り落すのも、切るに二ッは無い譯で……袖子さんの頭髮は、實は私が切つたのですよ』

餘り近く寄つて居るので、溝谷の息の酒臭いのが能く匂ふ。

『貴女の髮の毛も切つて上げませうか。はゝゝ、吃驚してはイケません。それは串戯です……どれ、水仙の生け方を敎へて上げませう……』

と又膝を進ませた――進ませたゞけ種女は退いて。

『溝谷さん、貴郎は無茶苦茶を敎へるのぢやァ有りませんか』

『如何致して、無茶苦茶なもんですか。奥さん、これでも本氣ですよ。大眞實なんですよ。ねえ、奥さん、溝谷の敎へ方は、一風違つて居るのですが、それは〳〵親切ですよ』

『本統ですか……』

『貴郎は私を信用しないから不可ですね。先づ此水仙ですね、これを植物學上の方から申すと、單子葉門の石蒜科ですな。や、これは貴女の處の先生に聞きたてのほや〳〵で。水仙や切らんとすれば手の狂ふ。此句は前から知つて居ますよ。はゝゝゝ』

と笑つて、又膝を進める。種女は又退る。

『花を分つて、生花、死花、殘花とある。生花は早咲で、先づこの水仙。人間で云へば貴女なんざァ早咲ですね。袖子さんなんざァ殘花でげす。殘花よりは生花に限るです。ねえ、奥さん、然うぢやァありませんか』

種女は立上らうとして、腰のあたりをわな〳〵爲せながら。

『最う先生がお歸りでせうから、妾は彼方へ參りまして……待つて居ませう』

溝谷は首を振つて、手を延して、グッと攫んだ水仙花。

『これは、水揚が秘傳です。へえ、鹽水にて捕すべしとあるですな』

（三十八）

溝谷が手にした水仙花は、わな〳〵と戰慄して居る。

『通を申すやうで甚だ失禮だが、ねえ奥さん、水仙は丁葉でなければいけぬといふのは、大いなる誤りださうです。水仙の葉を二枚重ねて遣ふのは、半葉に見するの義なりとあるから、如何も矢張葉と葉とは、斯う重ねる必用があるですな。斯ういふ樣に、それ、葉と葉と重ねる……好いですか、斯ういふ

手つきで無いといけませんよ。此所が難かしい處なんです。ちよいとお手を出して御覽なさい……』

種女は、唯酒の上と思つて居る。いつもの溝谷にしては調子が違つて居る。とのみ、それから溯つた處までは考へぬ。けれども、何んとなく手を取つて敎へられるのが、氣味の悪いやうに思はれて、躊躇して居ると。

『さア、敎へて上げませう。此所の秘傳は袖子の殘花先生には難かしいですからな。斯ういふ處は給心で行かんと不可ですから……』

困つて居る處へ、庭下駄の音。障子に射す日陰に袖子の切下げ髪、額の邊に角と見たは木の枝か。

がらりと開いた障子。

『溝谷さん、何んて事です』

『いよ――。先生……』

『何んですねね溝谷さん』

『いや早やからい處へ……』

袖子の顏が青楓なら、溝谷の面は紅葉。種女は何んの事も無いのである。

『今、其、貴女の代理で……』

『賴みも仕ないのに……好い加減にお巫山戲なさい……』

と嚙付くばかり。

『へに、へに、重々恐入りました』

と溝谷は悄然。釣舟に水溜れて、時を過した山吹の、それだ。

『先生……今日は……』

種女が挨拶すると、袖子は、それと心づいて、此人に入れる鍬は無し。枝を撓めるは彼の男にありと。

『如何も奥さん、つひ妾が居りませんで、飛んだ失禮を致しました。妾は、あの、直ぐと彼方へ參りますから、貴女は先きへ如何か入らッしやッて……』

『左樣ですか……』

待つて居た期會であると、種女は急いで敷寄屋を出れば、外は仲冬の風寒くして、思はず知らず肌づくろひ、前掻合せた一刹那、襟筋に枯葉の、雪花の如く

冷めたう觸れて、扨は彼の室の蒸暑うあつた事。

（三十九）

種女が母屋の方に去る下駄の音の全く聽にずなるまでは、袖子瞬きもせず溝谷を睨付けて居た。

溝谷は頭を抱へた儘である。

袖子の眼は見る〳〵血走つて、やうやく瞬きを仕始める、其都度に、口惜し涙が、ほろり、ほろり、其瞬きが繁く成ると共に、涙のほろ〳〵量倍して、柳眉逆立ち、花唇引裂けたかと思ふ、此所一臘博、雪を跳ねたる竹のごと、女の手は男の髪の毛を攫んで引倒して。

『何んて人だらう、お前さんは、お前さんは何んて人なんだらうねねッ』

衣卷ならぬ打棒は、水仙花。一打の丁に花の首飛んで蹴に落ち、又一打の丁に葉の腕折れて床の間に散る。丁々々は空手である。去かし早蔵形では無い、尾

花式である。昔ほど痛くは無いものを、溝谷はさも〳〵仰山に。

『痛いッ、御免下さいッ。アッ、痛いッ。迚も助からない、命だけはお助けなさッて……』

と拜む眞似。

『未だ此人は馬鹿にしてるよ。如何したら癖が癒るだらう』

袖子は、ぶる〳〵身を悶へて泣き止まず。溝谷は平蜘蛛のやうに爲つて。

『御免下さい……此通り……此通り……私が惡かッたのなら惡かッたで、此通り謝罪致します。如何か堪忍して下さい。ね、袖子さん、何んでも無いのですがねね……今のは』

『何んでも無い事が有るものか、何んにも知らない正木の奥さんに……』

『何んにも知らない正木の奥さんだから、生花の傳授を……』

『お前さんこそ何んにも知らない癖に……』

『いね、それがね、妙なもので、斯うした仲に爲つて居ると、知らず〳〵覺にるですね、日頃から其お手前に感心して見て居るから……』

『そんな事を言つて胡麻化さうとしたッて駄ァ目よ』

『駄ァ目よ……では困ッて了う。これからは決して手出しを仕ませんから、如何か今日の處だけは、御勘辨を願ひたいので……』

張肘をして、壁へ額をすりつけて見せる。

『油斷も隙きもならないとはお前さんの事だ。これから今日の樣な事があると……妾は覺悟があるんですよ』

『如何いふお覺悟で……一寸覗かして見せて下さい、高い樣なら落ちますから……』

『何處まで人を茶にするのだらう』

『今日は花の稽古日で……』

『それが悪いんだよ』

と毆たうとする。どッこいと厠手でさゝにて。

『へね、へねッ』

『能く聽いてお置きなさいよ。正木の奥さんに限りませんよ、誰にでもお前さんが、今日のやうな事を仕掛けると……』

『實際何も仕なかッたのだが……』

と頭を掻く。耳にも掛けず袖子は。

『妾の覺悟といふのはね、斯うだから、豫じめ知つてお出でなさい。あの、何んとか新聞ね、あの社へ妾は出掛けて行つて、記者の人に皆んな喋つて、三日續き位で書いて貰ひますよ』

《四十》

冬至梅の咲く頃と爲つた。正木博士は姉なる衆乃と共に、郷里宇都宮へ歸省した。これは亡父母の法事をする爲であるのだ。

留守は種女と錦やと、それからケンとであるが、博士からは信用せられたる溝谷千花が、事あらば直ぐと驅付けるといふ約束であるのに、二日ばかり少しも顔を見せず。三日目の正午過ぎ、ぶらりと來て、今日は鏡古庵の袖子が、生花の免狀を與へると云つて居るから、後からお出であれよと云つて去つて了つた。

留守中は、花も茶も、稽古には行かぬ意で有つたが、他の事と違うもね、然らばと支度して、種女は白山下へと急いだ。

格子門の鳴子。玄關口の驛路の鈴。要害堅固の大手を入ると、狠狽氣味で喜代が出て來て

『あッ、正木の奥樣でしたか……さア此方へ……』

と案内されたのは、座敷の裏に當る薄暗い一室。其所は袖子の居間なのである

何心なく襖を開くと、烟草の煙漾々たる裡に、袖子は立膝、溝谷は胡座、横捻りに座つて居るのは髮結のお大。

眞中に座布團を置いて、其上に白布を敷き、四隅を留めるに鉄釘を用ゐて、疊の表にグザと指込んだる樣。三味線屋の椽先に猫の皮を干したるに異らず。

三人の膝の前には、小さな笊を置いて、其中には白石と黑石。赤い達磨もあれば、四角な木片もある。碁を打つのでもなし、將棋を指すのでもなし、見馴れぬ歌留多には、梅あり、松あり、櫻あり。横に細長い箱があつて、其上に黑石を十一個並べて、一個埋まらぬ淺い穴。

袖子は手に持つ札の方を見詰めながら、頭だけは種女に下げて。

『待つて下さいよ。これドンなんですから……』

烟に卷かれた種女は、茫然として、其所に座つた。

『いよ、お出でなすつたな……正木の奥さんか……お手に葱澤山で、此奴で以て、びたり、びたあり、打たれた時にやァ痛うごした』

溝谷は卷煙草を横に啣へながら、これも連りに手の札を調べる。

『同じ葱でも、あの時は水仙だアね』

と袖子が言ふと、お大は手の札を下に置いて。

『夫婦喧嘩は好い加減にして、さア如何するんです。親から極めてお出でなさいよ、これドンで、姜と溝谷さんとの爭ひだからさ』

『口惜しいねえ、一人替に環だよ。さア出ましたよヤケクッで……』

と一ぺん身を動がす途端、切下げ髮の耳に亂れて、たしなみ好き常の袖子とは丸で別人の相。

『此所で僕が落ちる……待てよ、ヒキでこしらに横といふ方すだな。さしも知

らじな燃やる思ひをか。御免下さい、絶倍で、落なら一貫半で濟む』

手の札を、眞中に積んである札の上に加へて、白石一個と黒石を六個出す。

『へナチョコ野郎、逃げるとは卑怯だね。穢多町へ渚で、此人を高石にすると出ッ子無しだから厭さ』

と袖子は勃然とする。お大は、すらりと膝の先へ札を並べて。

『さァ參りませう、カヲクですよ』

(四十一)

『馬鹿にしてるぢやァないか、大役を抱へて居ながら、乙ゥ澄ましてるんだから凄いものさね。本統にお前さんは三味線が巧いよ』

と云ひながら、袖子は札へ手を入れる。

『妾は三味線、貴女は琴がお上手でねね』

とお大は札をのぞみつゝ云ふ。

『茶の湯生花の方はお上手だけれど、この方の花と來ると、おほん、でげすか

ら氣毒なものさ』

と溝谷が紙卷の吸口から卷烟草の吸殻しを取りながら云ふ。

『お前さんは默つて引込んでお出でなさいよ』

ポンと一枚手から菊の札を打つて、塲にある同じ菊の短尺を取る。

溝谷は小さな聲で。

『だから私は引込んで落ちたのだ』

と云つてくるりと、向きを種女の方になほし。

『奥さん、御覽なさい、面白いぢやァ有りませんか。これも矢張り『花』といふのですよ。當節では、何家の奥さん方でも、これを知らない方は無いのですよ』

種女は。

『然うですか……』

と云つた儘、不思議さうに又面白さうに、塲の方を見入つて居る。

『ねね、奥さん、これは如何しても知つて居なければならん事ですよ。此位面

白い遊びは無いのですからな……』

種女は再び。

『然うですかねえ……』

と云つて、依然眼を二人の方へ。

菊と菊と合せるのである。紅葉と紅葉と合せるのである。手のと、揚のと、伏せたのと、唯それだけの事なら誰にでも出來ると考へた。

『ヒキで並べてるのだから、打てないねえ、ま、打てないねえ、斯ういふ時に二掛持はつらいよ』

と袖子は連りに困つて居る。お大は鯨の汐待と云つた樣へで、樂しんで居る。

溝谷は、一寸袖子の手を覗いて見て。

『によ——ッ。や、ねらいこッちや。こりや打ちにくい筈や。考へなはるのは無理おまへんなァ』

と下手な上方詞で交ッかへす。

『此所が度胸だ。人こそ知らね沖の石の打當てッ……』

手から牡丹の短尺を打つて、札をめくると蝶々の附いて居る同じ牡丹。

『へえ、よろしう御座い……』

ポッと一息して、矢庭に烟管を取つた。袖子の顔は造花の牡丹に電氣が點いた樣で。

『ねえ、奥さん、此通りで御座いますよ。だからコレばかりは止められませんよ。這んな面白い物は無いのですよ。恰度これで一年濟んだのですから、此次ぎから貴女も遣つて御覽なさい。いえ、譯は無いのです、直き覺えられて了ひますよ』

と袖子は只管にすゝめる。お大も亦。

『奥さん、まア試めしに遣つて御覽なさいよ。全く此位面白い物は無いのですから、なアに貴女、直ぐと覺えられますよ。何しろ花の先生がお教へなさるのですから……』

手早く溝谷は花札を取つて。

『それ、斯うですよ。手に七枚づゝ、蒔いて、好う御座んすか、場には六枚、

それを三人で引くのですが、それには場役と手役といふのが有ります』

((四十二))

それ、坊主の月にも雲あり、幕張りの櫻に嵐なからめや。雨を入れて素十六の出來役に銀見を流し。萩の下から猪が飛出して、八十八の前調べに替へ環の駒まで走らせる。絶躰絶命絶倍の駈引。馬關虎には似ずとも門司猫位は達者に引く三人が、今日初めて札を手にして、切れば溢し、蒔けば散らす、種女の細腕に總崩れの敗軍。これは見事のお手並だと、袖子も譽める。お大も譽める。溝谷は念を入れて、一層譽める。

彼是夕景。旦那樣も姉樣もお留守、錦一人で淋しう御座いませうからと、種女切上げてお暇を乞へば。それでは一ト勘定致しませうかと、白石、黒石、黄駒赤達磨。裏に女百相を給で出してある上方屋製の切符まで出して數へ合つて、三人から種女の前へ出したのは、紙幣、銀貨、白銅、銅錢、ざらりと目分量十二三圓。

「これを如何するのですか……』

種女は初めて驚いた。

袖子は微笑して。

『好いのですよ、これを貴女が持つて入らッしやれば好いのですよ』

種女は泣出したい樣な顏をして。

『妾は困ります……妾は何も知らなかッたのです……』

お大まで笑ひかけて。

『そんな事を仰有らないで、お持ちなさいましよ。好いぢやア有りませんか正木の奥樣……』

『だッて妾は……妾は然うでは無いのだと思つて、つひ……』

『然うで無いも有るもありませんよ。何んでも無い事ですわ。ほんの貴女、なぐさみに引くのでして、子供がお菓子を賭けて双六を爲るのと同じでさアね何家の奥さん方でも、此頃これを爲さらない方は無いのですよ。まア、好御座んすから持つて入らッしやい。それで無いと面白くないですから……』

椎の實を睹けて、お手玉を取つた事がある。蛍と蛍と首引さして、負けた方に草籠を背負はした事がある。花歌留多で金錢を……同じ理屈か知れぬけれど、種女には如何しても持つて行かれない。袖子とお大とが両方から勧めるにも拘らず、手を出しかねて居る處へ、溝谷が横から悉皆掻漚つて。

『ぢやァ斯う仕ませう、私に委せて下さい。私がこれを預りませう。好いでせう、私が悪いやうには仕ませんから、私に萬事委せて下さい』

お大を紹介した袖子、其袖子を紹介したのは溝谷である。三人の内では溝谷が一番懇意な人であるから、此場では溝谷を味方と頼まざるを得ない。

『よろしい様に……』

種女は云つて、逃げる様にして室を出た動作は、折角茶の湯で覺にかけた禮法を、滅茶々々に破つて了つて居た。

（四十三）

明くる日溝谷が來た。應接室で種女は面會した。

『昨日は奥さん、如何も御迷惑でしたらう』

種女は、何と答へて好いか分らぬので、默つて、唯、會釋した。

『えかし、奥さん、好いなぐさみぢやァ有りませんか。如何です、面白う御座んしたらう』

後で金錢さへ出されなかつたら、確かに面白かつたに相違ないので。

『はい……お蔭で面白う御座いましたが……』

『初めてゝせう、あんな事は……』

『本統に初めてゝすよ』

『初めての方にしては實に如何も巧いもんだッて、袖子さんもお大さんも大層誉めて居りましたせ』

『まァ、何んで姜が巧いもんですか……』

『それがですねね、アレの上手下手は人間の性質によるのですねね。彼のお大なんて人は、古い花引きですが、それでトント上達しない。第一に出好きで一年の花を十三度出るといふのですよ。それが知らずに手八なんか蒔いて、

蒔直すから、それ、十三度になる。はゝゝ、をかし、なぐさみに遣るには、ァゝいふ人が居ないと面白くないですからねね』

『左様ですかねね』

と種女は云つた『なぐさみに遣るには』とは、裏のある詞だ。それには氣が着かぬ。

『袖子さんだッて上手な方ぢやァ有りませんが、當時では花を引くのを知らないと、御婦人方の交際は出來ない位ですから、連りに袖子さんも勉强して居るのですが、私の見る處では餘程貴女の方が性質が好いですね……』

種女は思出して。

『あの、それですけれど、お錢貨を賭けて遣つては惡いのでせう。何家の奥さん方でも、花はおやりなさらうけれど、お錢貨はお賭けなさらないのでせう』

溝谷は熱心に首を振つて。

『然うで無いのです。それはお錢貨を賭けないと、如何も手が上らないですから、これは最う默許ですな。旦那様方も大目で見て居るですな、といふ旦那自らも皆遣るのですよ。花を引かない人と云つたら、先づ無いと云つて好いでせう。これがお互ひの秘密ですな』

『でも、家の主人は、花は存じますまい』

『それが貴女大違ひで、私の友人の谷田だの粟島だの、皆學生です。學生が先生と花を闘はした事があるんですもの。をかし、其後は碁の方……貴女が入らッしやッてからは貴女の方に凝つて居らッしやるので。はゝゝゝ、暫くお手合せが無いやうですが……』

『あら……然うぢやァ有りますまい』

『其所が人間の秘密ですよ。貴女にも花を引く位の秘密が有つても好う御座いませう』

『それは然うと、昨日の。貴郎にお委せ申したのは、如何なりました』

『あれは、斯うです。矢張貴女の勝利なんですから、私は今日、持つて參りました』

『ねッ……それぢやァ貴郎、困るぢやァ有りませんか』

『それです、奥さん、向ふだッて一度出した物を取りは仕ませんよ。ですから斯う爲さい、今日行つて、最一度引いて、勝つたいけ敗けてお歸りなさい。それが一番好い方法です』

（四十四）

札起しで場を極めて、袖子から、お大から、種女から、溝谷と爲つたのを、袖子は斯う言つて溝谷と場を替へた。それは千花が中々のズル屋だから、初心の種女の手を覗いて、いけなからうといふ事だが、其實は彼の花の傳授の狼藉以來、丞きりに警戒して二人を接近せしめぬ。それであるとはお大見て取つて、別に此勝手千萬なる座取に向ひ、苦情がましい事を云はなかつた。種女は此間勝つただけ敗ける意で來たのだけれど、打出して見れば面白いので我を忘れて勝氣に行く。出が籠むのは勿論の事である。手にトウ一が附いたので、出を掛けると、上席がタン一で、下席がピカ一。吹消された上に褒美を取られて引下り。親で青のッカミで出ると、ピキにズイズ

イを食つて、胴二で赤が出來る。クッ、キが有れば敵にはハヂケン。いくら遣つても勝目がなく、夕方に一先づ切上げて見ると、結局種女の敗けが三十六圓何十錢。留守の會計だと博士から渡されて居る何程かと、自分の小遣として持つて居るのと合せても、未だ足らぬ。

如何したら好からうと途方に暮れて、上氣して、帶の間へ手を入れながら、考へやうとしても、纏まらぬ智惠。

見て取つた袖子は、煙草を急がし氣に燻かして。

『奥さん、あの、何んですよ。ほんの妾達のは、なぐさみで引くのですから、今日お出しなさらないからッて好う御座いますよ』

お大も札の掃除をしながら。

『奥様、又今度お遣りなさる時に、お勝なされァ其時に差引して、出ず入らずになりますから……なァに貴女、これはッマリ同じ事になりますので、勝つたが勝つたにならず、敗けたが敗けたになりませんよ。度々遣つて居る内には、損も徳もありません。ですからお錢貨を賭けて仕ましても、綺麗なもん

で、他の賭博とは違ふのですよ』

溝谷は酌冷しの茶を一口飲んで。

『それが好いですな。けれども忘れちやァいけないから、斯うすると好いですな。手形を書くですな。然うして置けば手形を遺つたり取つたりして、一々錢勘定なんて仕なくッて好いですからな』

斯くの如き順序で以て、種女は手形を書かされた。

博士だけ先きへ歸つて來て。糸乃は少し遲れるといふ事だ。それは自分が宇都宮を出た留守に、彼方の弟嫁が客滯團の綻直しを怠つて居たとかで、それを引受けて遣つて來るといふ事である。彼方も此方も世話が燒けて、妾の躰は二個有つても足らぬとこぼしたとか。

種女は隔日に白山下へ行く事と爲つた。博士は花の生け方が益々上達するであらうとのみ考へて居る。

白濱袖子が茶の湯生花の他に、手形へ記入の書法まで敎へて居やうとは……。

《四十五》

すゝめられて已むを得ず引いて、つい面白く爲つて、うか〳〵と引いて、勝つては困り、敗けても困り、其埋草にと氣を締めて引いても、向ふは三人で通し花。此方は初心この上無しの種女か腕前。熱しれば熱しるだけ替わ環又替わ環切手を何枚書かされたか知れぬのである。

今は止すに止されず、さりとて止されねばどの位敗けるか知れぬのである。袖子さんも好い人、溝谷さんも良い人、お大といふのも悪い人とは思はれぬから、決して妾を敗かして、如何の斯うのといふのでは有るまい——だけ、それだけ、此方が氣毒で、いつか一度は切手でなく、正金で支拂はねばなるまいと、種女つく〳〵考へたる一日。其所へお大が髮結に來た。

『最うお正月も數ゐるやうに成りましたので、嘸お世話しう御座いませうねわ』

と言ひながら、勝手を知つて居るので鏡臺を先づ取出し。

『お椽側が日當りが好くッて、暖かで御座いませう。今日は風も吹きませんから』

と錦やの來るを待たず、座布團まで敷いて、抱へて持つて行かぬばかりに種女を其所へ座らせ、肩當などを爲して、ぷつり、元結を切ると同時に、お大も亦口を切つて、梳いて、曲直しをして、又梳いて、いよ〳〵結ひに掛るまで、のべつ慕無しのお喋り。いよ〳〵根を締めに掛つてからは、元結の端を齒で留めるので、少しつゝ途絶ね、前髪を取る、鬢を出す、格好を見るので次第次第に口數が減じ、いよ〳〵出來揚りの頃には暫く無言。

鏡に寫るお大の顏を、何心なく種女が見ると、薄氣味の惡い笑を口邊に湛へて何をか云出さんとして、ためらへる狀。

種女は襟筋が寒いやうな氣がして、知らず〳〵首を縮めると、鏡に見ねるお大の顏は、鏡に見ねるおのが耳を、一口に食はんとするかの如く接近したので、驚く途炭、極めて小さな聲音で。

『ねね、奥様……甚だ申兼ねましたが、此間中から頂戴致して居ります……そ

ら……あれで御座いますねね……歳暮に近くもなりましたし、甚だ恐入りますが、彼の内を二三枚……おほゝゝ、相濟まないのですが、お取替ねなさッてねね……』

椽側の内には義姉の衆乃が、縫物をして居るのだ。

自分の顏の緋のやうに染つたのを見れば、鏡にも向はれず、膝の上のわが手に眼を着ければ、指がぶる〳〵ふるねて居る。

衆乃はそれを聽いてか、但し何心なくか、大きな咳拂ひに又胸は早鐘。

『はい……』

と答へた聲は意外に高く響いたのに、自分ながら肝を潰すと、今まで具合の好かつた髪の結び方が、急に根が釣つて痛いやうに感じられた。

『なに、今日でなくッても宜しいのです。兩三日内にねね』

お大は斯う云つて、矢張にやり〳〵と笑ひながら、反古紙で手を拭いた。

《四十六》

それからは少しも其事を口に爲ず、いつもの如く暇乞してお大は去つた。種女はあわてゝ椽側の髮結うた座を取片付けて、座敷の內の衆乃から聲を掛けられるのを恐ろしがり、わが世をのがれ家は此所ばかりといふ心で、塞所へ行つて見ると、座敷の用から勝手元まで逗廻はされるので、心甚だ平かならざる錦や が、襷掛けのいそ〳〵と礒節を小聲で唄ひながら、衆乃から小言が出るなら筋を出して來い、お暇が出るなら、何時でも來い、實此方は自暴自棄だといふ意氣組で、洗物でも何んでも手荒い事。

『ねゝ、錦や……』

と種女は聲を掛けた。

『何んで御座います、奧樣……』

と洗物の手を留めた。

『あのねゝ、お前にねゝ、內所で相談があるのだがねゝ……』

と後を口籠る。

『藤村へ參るのですか……』

と意を買喰ひに取つて錦や莞爾たり。

『然うぢやア無いのよ……他の事でねゝ錦や……お前に賴みたい事があるんだがねゝ』

『まア如何いふ事で御座います、妾は貴女のお爲なら何んでも仕ますが、あの鬼婆アの用なら厭アな事で御座います』

『誰にもねゝ、他の人には話せない事なんだがねゝ』

『へゝ……妾にばかり……何んで御座います奧樣……』

と襷へ拇指を挾んで問寄つた。

『それは大きな心配よ』

『大きな心配……』

『如何したら好いだらうねゝ』

『まア何んで御座います、其御心配といふのは……』

『妾……大變な事を仕ちやッて……お金子が急に入るのだがねゝ……』

『お金子が……急にお入りなさるの……』

『如何か出來ないだらうかねゝ』

『出來ませうよ』

錦やに相談すれば出來るか、と思つた種女よりも、出來ませうよと輕く答へた錦やの方が若いのである。

『出來るかねゝ、錦や……』

と直ぐと嬉しさを面に現はした種女は、より若い人よりも若いのである。

『本統に出來るかねゝ、然うだと妾はどんなに嬉しいか知れないよ』

錦やは心得顔で。

『あの、奥樣、妾は宅に居ります頃は、能く近所で遣ひに頼まれましてねゝ……』

殊更に聲を潜めて。

『質を置きに參つた事があるので御座いますよ』

『質……』

質……質……それは戸隱の中社に居て伯父の家では常の事であつたが、それから今日まで質といふ聲は、殆ど耳朶に觸れずに居たのを、今久しぶりで質といふ、錦やの注意の一聲は、山間の木枯しを想起した如く腐に粟を生ぜざるを得ない。

質——質に入れた物の出た例を、種女は未だ曾て見た事が無いのである。

置くとすれば何を……博士から花の稽古に精を出すとて、褒美として買つて貰つた、サイアムルビー入の指環。ケンドルビー入の指環。此二個より他には無い。

二個の指環を入れて、若し質から出せなかつたら、如何しやうと考へると、今の今喜んだのが、何にもならぬ。

『質に置かないで出來る工風は……』

『それは奥樣、有りませんよ。質の他には妾は存じませんが……あッお牧婆アさんに一度、御相談なさッたら如何でせう』

（四十七）

程遠からぬ巣鴨の里。植木屋兼松の住家にお牧婆ァさんを訪れた種女。室つゞきの椽側に猫の盃を取つて居るのを、山茶花の枝越しに認めた種女の喜び背斷の裏がへし、婆ァの宿を雀の子が尋ね當てたのである。手土産代りの紙包。一圓紙幣が少く爲つたので、半圓銀貨二個、中でカチャ〳〵音の爲るのを、極り悪氣にさし出し。

『これでねえ、何か買つて下さい』

と種女が言ふのを、お牧はほく〳〵喜びの顏の内にも眉を顰めて。

『這んな御心配を爲さるもんぢやァ有りませんよ。妾の家へ入らッしやるのにお土産なんて餘計な事です。唯妾の方では時々遊びに來てさへ下されば結構なのですから……』

さかし折角の御芳志と、お神棚へ上げて。

『座敷は此通り散らかッて居りますから此椽側の方が却つてよろしう御座いませう。さア、これでもお敷き爲さいまし、日が當りましても板の間は冷ねますから』

と毛布を四ッに折つた上に座蒲團を載せて敷せるやら、別口の茶を入れて出すやら、厚燒の鹽煎餅をすゝめるやら、親切は茶碗に溢れ、情誼は厚燒よりも厚く見えて、重ね〳〵の好意、下に敷くのも勿体ない樣。若し自分に實家といふのが有つたら、此樣に好い所であらうなど、種女思へば言葉切れて、お牧の饒舌は獨舞臺。

『今日は貴女、娘は春木町の親類へ參りましたし、婿は小石川のお屋敷へ仕事に出掛けまして、妾一人ですから、もッくりお話し爲さッて居らッしやいまし。お好きな五目ずしでも製にませう』

五目ずしはお牧自からが好物なのである。

『あのねえ、今日はねえ、長く居られないのだよ』

と打萎れて種女。

『何故で御座います、又、彼の、八釜し屋が眼張つて居るからですか……』

『然うなの……それにねえ、ちッと、妾、困つた事が有つてね……今日は相談にねえ、一寸來たのだからねえ』

『談に一寸入らッしやッたのですか。一寸ぢやァ仕様が有りませんねね。貴女大ッぴらで出て入らッしやい、お牧婆ァの處へ遊びに行くッて、なァに貴女、他の家ぢやァ有りますまいし、何、構うもんですか……』

『だけれどもねね……』

と溜息。

『それで相談とは何んなので御座いますよ。婆ァで間に合ふ事なら、何んでも言つて下さいまし』

言ひ好い様に口火を着けて呉れたので、種女は先づ一口。

『妾、ねね、急にお金子が入るのだがねね』

お牧の膝からヒョイと猫飛んで庭に走る。舳眼兒驚いて枝がら枝に、チョン、チョン。

((四十八))

『まァ何の御相談かと思ひましたら、お金子の事で御座いますかい。いづれ大

金なので御座いませうねね』

とお牧婆ァさんは早や腰が抜けさうな様子。

『あの……一寸……あの、五十圓も有つたら好いのだらうがねね』

と種女は息苦しい様に言出した。

『まァ、貴女、そのお金子を如何なさらうと仰有るのですか。次第に由つてはそれは又、都合の出來ない事も有りますまいが、奥様。まァ、全躰、如何いふ筋に御入用なので御座いますよ』

『それはねね、お前にだけ打明けるのだがねね……あのねね……困つたのでねね……』

舌の先の濕りでも乾いたか、言淀んで暫くためらうて居るのを、お牧は先づ急須の口を茶碗に向けて。

『如何爲さッたのですよ、奥様。まァ悉皆お話しなさいましよ。妾ですァね、心配だらうぢやァ御座いませんか』

『あの……ねね……お花の先生の處で……』

『あの、白濱さんの處で……』

『花をしてねゝ……』

『それで……』

『大變に敗けて了ッて、手形を、妾、書いたのだよ』

『へゝ、花の方にも勝敗が御座いますかい』

『なに、花なんだよ』

『何んの花で御座いますゝ』

『花合せの事なんだよ』

『まア……』

と齒の無い口を閉ぢ得ないで。

『まア……』

と再び驚きの聲と呆れの聲とを合せて發して。

『まア如何爲さッたので御座いますゝ。貴女が何時の間に花合なんど……まア本統に……妾は、まア本統に、まア本統に、まア妾は……』

『そんなに婆ァや言はないでお呉れ。全く妾が悪かッたのだから……』

と早や涙。

『いゝ〳〵貴女がお悪いのぢやァ御座いません。お敎へ申した奴が悪いので御座います。誰がまアそんな事を……』

お牧婆ァさん、皺の中から青筋を引出して憤つた。

『いゝ、妾が悪いのだよ。それァ敎へた人達は、決して悪くは無いのだからねゝ……』

と種女は未だ夢から覺めぬのである。

『いゝ〳〵それは何んと仰有つても、敎へた奴が良く無いので、貴女は何んにもお知りなさいませんが——何んにもお知りなさらない貴女に、そんな事を敎へ申すといふ、まア、そんな法が有るもんぢやァ御座いません。敵手は誰です、いゝさ、誰で御座いますよ花の敵手は』

『お師匠さんと……』

『それから……』

『溝谷さんと……』

『それから未だ有りますか』

『髪結のお大……』

『ねッ、あの、お大……髪結のお大が……』

お牧婆アさん首を縮めて、身慄ひを仕て見せて。

『髪結のお大なら名代の花引きで、イカサマに掛けては東京で一二といふ代物ですよ。あれは諸方の奥様方を引掛けて、酷い事をして廻つて居る毒蟲とで。も申すので御座いませう。やれ、はや、これは、飛んでも無い者に……まア本統に本統にで御座いますねね』

（四十九）

名代の花引髪結のお大。それが本職であるとお牧婆アさんから聽いて、種女はハテケンが四三に變つた程驚き。世の中には其樣な手が有るものか。其手を引く人があるものか、其手を引く人がお大であつたのか。すれば、彼の溝谷も怪

しい。又彼の袖子さんが……怪しいであらうか。如何も之は分らぬ事。世の中は譯が分らず。裏の裏には裏のある、扨も恐しや〳〵。戸隱の山里には此樣な恐しい人々は無いものを、如何なる事があらうとも、故郷に歸るなんど言出すなと、良人からの厳しい言渡しでは有つたが、こりや斯うしては居られぬ。一足飛に飛去らうかとまで。

お牧、これより策を授けて、當分白山下へは行く可らず。茶の湯生花の稽古日には、家を何氣なく出て置いて、其足で此方へ來て、悠々遊んでお歸りなされ。それには百圓二百圓の手形が出してあらうども、兎も角も四五十圓で、それを綺麗に取戻されるやう、妾がお大に談判仕ませう。其上で又年でも越したら、何んとか其所に致方も御座いませうと、天晴なる軍師が種女の味方。

それで其の四五十圓——話は元に戻つて來た。

同じく是五十圓の工面。先には氣樂なといふ心から、支拂ふつもりが、今では惡黨と縁切に、扨、如何しても五十圓は遣らねばならぬ。

お牧の智惠も錦やと同じ壺に落ちて、指環を二個の質入。足らぬ處は婿に相談

して。それで、一先づ。

○　○　○　○　○　○　○　○

種女は病氣で五日ばかり寐た。考へて、考へて、考へれば考へる程、人間が恐しく、溝谷恐しく、袖子恐しく、お大恐しく、人といふ人皆恐しゝ。

錦やに頼んで、お大が髪を結ひに來たら、頭が痛む故、當分束髪にして置くと斷わるやうに言附て居たが、如何したのかお大は來らず。扨はお牧が談判成功した事と幾分か心安んじ、それ、これ、樣子の知りたさに、表向は花の稽古、其裏道を巣鴨の植木屋に向はんとする横手から。忽然として姿を現はしたのは溝谷千花。

『奥樣、何處へ行くのです……』

『あッ……』

洋傘を傾けて急ぎ足になるのを。

『どッこい、待つた、奥樣、逃がしませんよ。話があるのです、一寸、一寸、一寸、一寸で好いのですよ。正木の奥樣、貴女にお返へし申す品があるので

す。へゝ、手形を殘らず返へして上げますから、一寸です、一寸、本統に一寸、つひ其所まで……其所までいやすよ、一寸、一寸ですよ』

一寸、一寸、と言つて、半町ばかり附いて來た溝谷。種女も逃げ切れず。

『一寸ですか、本統に……』

（五十）

近頃東京人類學會の會員何某、コロボクウングルの遺跡を小石川猫股橋の此方に發見してから、人類學者の探檢、考古家連の探集、我も〳〵と出張して、石斧、石鏃、土器、骨器、扨は貝塚土偶まで掘出したといふ大評判。

粟島谷田の両學生、石斧なら磨製を、石鏃なら瑪瑙を、土器も土偶も完全なのを出して、龜ヶ岡か、猫股橋か、と云はれるまでに噂を高め、大學の教室を除いては先づ我々が第一の珍品秘藏家たらんなんど、學術の研究よりも少々慾張主義。金の茶釜でも掘出すかの如き意氣組で、一人はシャベル一人は鶴嘴。ズック製の採集袋に握米飯を入れて出向いて見た。

此所は介墟ではないが、遺物包含層としては最も有望なる個所で、土器の破片は山の如く積んである。去かし、両學生は目的が大きくある。五六尺堀下げてそれから横へ〳〵と穴を開き、上から壊れる土を掻出しては又横へ進んで行き彼の虚無黨が秘密の隧道を穿つて、鉄道線路を破壊せんと企てた、其時の働きを眼前に見る如し。枯草の下を土龍の如く穿ち進むので、表面からでは二人の姿は認められぬのである。

『おい、粟島、僕の方へ然う土を寄越しては不可よ。見給へ、膝ッ小僧が埋没して了つて、起上る事が出來ないぢやァないか』

『やッ、それは膝ッ小僧か。僕は又土器の底だと思つて、今堀出さうかと思つて居たのだ』

『鶴嘴でも打込れて見給へ、堪つたもんぢやァない、片足折れるよ』

『土偶の片足から見ると價額が安いから、折れたら我慢して置き給へ』

『墓石のりで塗きやァ仕まいし。兎角君は慌てるから困るよ』

『お互ひ様で、桑の根ッ子を骨器と間違へたり、招鉢の破片を裏模様のある土器だなんて、大發見でも仕たやうに云つた人もあるのだからなァ』

『おい〳〵無駄口を言つてるのは事業の進行上甚だ不利益だぞ』

『其通りだ、谷田、去ばらく無言で堀當てやうぜ』

『此方針で進むと、氷川神社の椽の下へ突抜けて、猟犬の臺尻へでもぶつかりさうだ』

枯草原の穴の中。二人無言で堀進む耳の根に、何處からか聽ねる男女の話聲。

『ねね奥さん、斯ういふ所でお話しするのですもの、他に聽く者は有りません から、何んの遠慮無しに私の腹の中を申上げる事が出來るのです。ねね、奥さん、其所の石燈籠の臺へでもお腰をお掛け爲さッて……おッと、冷ねますなら手巾でもお敷きなさい。それとも枯草の上へ羽織でも脱いで、其上にお座りなさるか』

『一寸、と仰有つたでは有りませんか。一寸、話しがあるからと仰有つたから其意で參つたのですよ。腰を掛けるも座るも無いぢやァ御座いませんか』

谷田は粟島の耳にさゝやき。

「おい〳〵頭の上で話を始めたのは溝谷ぢやァ無いか』

『女の方が分らないが、何しろ彼奴又自分極めのバイロン主義を實行する氣だらう。默つて聞くべし」

『飛出して驚かすべし』

『いざと爲つたら毆るべし』

『先づそれまでは忍ぶべし』

『石棒の頭が見ねちよるが、ちよッ、發掘中止とは情けない』

（五十一）

栗島谷田の頭上の男は、二人を踏付けながら語り進んで。

『一寸です、貴女さへ承知して下されば一寸で好いのです。ねね、奥さん、此頃花の稽古には、一寸も入らッしやいませんですねね』

『……病氣でしたから……』

『御病氣は存じて居ります。ですが、貴女が植木屋へ相談にお出掛け爲さつたのも能く存じて居ります』

『あッ……』

『今日もこれから入らッしやらうとする處を、私がお呼留め申したのですねね、然うでせう、如何です、お手の筋でせう』

『そんな事は、まア、如何でも好いぢやァ有りませんか。それよりは御用を早く……』

『用といふのは、それから段々話して行かぬと分らないですからな。何故貴女は袖子さんのとこへ入ッしやらないのです』

『でも……何んですから……』

『何も貴女、御心配なさる事は有りませんよ。貴女は何んでせう、お大が言出した事で嘸お心をお痛め爲さッたのでせうが、なァーに貴女、あんな事は何んでも無いですよ。何故私に御相談なさらないのですよ。私は貴女を、どの位思つてるか知れませんよ。はい、本統です、私は貴女の爲なら、何んでも仕ます。火の中へでも、水の中へでも飛込みます』

穴の中の谷田は栗島にさゝやく。

『今に見てろ、穴の中へ飛込ましてくるるッ』

『玄ッ!!! 默ッて聽くべし。今までは前提、これから本題に入るのだから』

枯草むらの間では、地底、人あり、こは知らず。

『これ御覽なさい、私は此所に悉皆貴女の書いた手形を持つて居ます。それ、一枚、二枚、三枚……十二枚あります。お大の分は別ですが、袖子さんの分を合せて、十二枚。計算して見れァ可成り大金……これを直ぐと博士の所へ持出して……』

『あッ、そ、それは……』

『いゝ、なに、決して持出しは仕ませんけれど、先づ持出して了へばそれ切りで、私が貴女に對する忠義立は消滅して了う……ねゝ、奥さん、私は、これに就て、貴女に眞面目でお話し申したい、それが爲に、這んな所へお連れ申したのですが、奥さん、何も貴女、百圓、二百圓、花を引いて敗けたからッて、心配するには及ばないです。花を引いて敗けた金子なら、花を引いて又

お還しなさい。それがです、それは何んの譯は無い事で、最少し花の引方を、御研究なされば好いのですから……斯う爲さい、私が花の必勝法といふのを傳授しませう』

『あれッ、溝谷さん……妾は……』

『何んにも仕やァ仕ません、必勝法の傳授を、何處かでお敎へ致したいのです』

『妾は最う花にはこり〳〵仕ました』

谷田はシャベルの柄を握詰め、栗島は鶴嘴の先を尖らして、身搏へたり、危機一髮!!!

《五十二》

アイヌの口碑に蕗の下の人の女子、土の椀と食物と交換せんとて、窓から手ばかり出したのを、强て中へ引入れやうとした爲めに、怒つて其人種は何處へやら去つたとある。

種女は怒つたのである、何事も誘導に委せ勝の種女が、此時、凜然として拒絶

した態度の氣高さには、意外の感を以て溝谷は恐縮した。

忽然として眼前に二人の若者が現はれた。溝谷は意外も意外、人間が地中から噴出したのに愕然たる横面へ、既にびしやりとシヤベルが當つて、これはと振向く頭にコツリ鶴嘴の先が降つた。

『酷いなア、痛いッ、ぢやアないか』

『酷いも何も有るもんか。貴樣のやうな動物は、どんな目に遭はしても好いのだい』

『友達甲斐に柝檻して遣るのだい』

『生埋にして遣るのだい』

『先史時代にも貴樣のやうな奴は無いのだい』

『有つたら珍らしいから、博物館に納めるのだい』

『人類を脱してる。生かして置いて動物園へ引渡さうかい』

溝谷を打擲して居る間に、種女は夢中で走去つた。

『貴樣は、柳町の白首でも引張つて來たのかと思ひの他、正木博士の夫人を連れて來て、不敬を加へやうと試みるとは、け、け、けしからん奴ぢや』

『貴樣のやうな奴とは絶交だ、美術界に汝如きがあるかと思ふと、實に歎はしい譯ぢやわい』

『然う君達腹を立て給ふな。彼のバイロンを見給へ……』

と溝谷は袖の泥を拂ひながら云ひかゝる。

『そら始まつた。そんな腐つた說を聽されて溜るものか。バイロンを横捻りに嚙つて、ニイチエを逆樣に鵜呑うといふ心得違ひの破廉恥漢!!! 說を立て德義を蹂躙しやうとするのだから、罪が深いわい』

『穴も深いわい、埋めッ了へ……』

『此奴を埋めるのは構はないが、折角堀出しかけた石棒が惜しいわい』

『構うもんか遣付けろ』

溝谷は手を合せぬばかり、五つ六つ續け樣にお辭儀をして。

『如何か君達、生埋だけは勘忍して呉れ給へ、其代り雜司ヶ谷へでも往つて、小鳥燒でも驕るから』

粟島、憤然、又一喝。

「いつもなら軟化するが、今日はイケないッ」

《五十三》

雪の深沓を長野市で脱いで、草鞋の紐を本郷の正木家の勝手元で解いた戸隠山案内の老爺鎌田平内。

土産には手造りの蕎麥粉、更科よりは戸隠が本場と評判は手力雄命、天の岩戸を打開き給ひたる其腕節の強さにあやかり、氏子麺棒を取つて打のめせば、他に類無き珍味、博士様とやら姪婿の正木殿に、是非とも食べさせ申さんと、歳暮から、年始へ掛けて、雪の山の下、氷の村の中を出て來たのである。

博士は喜び、能くこそ御座つた。もる〳〵逗留して東京の花見までは是非にと云ふを、種女は氣兼して少しも早く歸らす算段。それも衆乃が居るからで、厭な顔を爲れるのを見ては、それに氣の着かぬ平内に代つて、一層心苦しいのであらう。

とは知らぬ平内、ほく〳〵喜び、來て見れば山猿の種女が、何處となく都馴れて、立居に去とやかさ、言葉に滅切と東京ぶりが附いて、老爺なら一生居ても取れまい信州訛りが、一年足らずでこれは吃驚する程失く爲つて居る。これも婿殿の姉様とやらが面倒見られたお影であらうと、涙まで流して禮を述べるは何處までも親身の暖かい心から。

博士の著述も荒方脱稿して、最早捕盡の事で溝谷に來て貰ふ必用が無いのである。去かし、碁でも圍まうと思つて呼びに遣つても、如何いふものか來ない。

それで、平内老爺を相手に、晩酌の卓子に就き、平内には日本酒、博士は西洋酒を傾けつゝ、いろ〳〵の世間話。お酌には種女が附いて居る。空しき洋盞に氣のつかぬを、平内が心配して。

『こら、旦那様にお酌を……』

と促がしたので、何事か結ぼれ心。何を考へて居たのか自分にも分らず。

「然うでしたねに、つひ、迂濶……」

日本酒の銚子を持つて注がうとして、又氣が着き。

「おや、妾は、まア……」

再び洋酒の壜を取つた、其指の先に博士は眼をつけて。

「お前は此頃指環を嵌めとらんが、如何かしたのかい。伯父さんに御覧に入れたら如何ぢやな」

何心無き博士の此一言は、昔三山の火祭の故事、俄に然付く思ひがして、種女は壜を取落さうとした。

平内は、猿田彦の古面よろしくといふ顔——酔心持。

「何から何まで、まア、にらい事で、丸で生れ變つたやうに爲つて居るのに、指環まで買つて頂いたとは、それは大抵の事では御座りませんぢや。難有い勿體無い。頭の先から足の先まで結構づくめで、戸隠に居たら夢にも見られんぞ。村へ歸つて此話をしたら、どの位、私の鼻が高くなるか知れませんぢや。どれ、其指環を拝見さして呉れ。やア、早く見たいわい、お種……」

「指環は……大事に、あの、納つてあるもんですから……」

博士は笑を含んで。

「そんなに大事にする程の指環でも無いが……」

と言ふを、皆まで聽かず。種女の心は粉々に破碎れて、わが意ともなく立上つて、居間の方へ逃込うとする處へ、錦やは一封の書狀を持來つて。

「あの、このお手紙を旦那様にと申して、お大さんが持つて參りましたよ」

髮結のお大が持來りたる書狀は正しく溝谷千花よりである。

(五十四)

天王寺蕪と宮重大根と相對した。お大對糸乃の舌戰。

「溝谷さんの手紙は今、旦那の方へ持たして遣りましたが、何んですかい、妾にはお前さんから、改まつての用があるとお言ひのですかい。はい、如何い ふ事ですか承はりませう」

「なに、改まつてと申したからつて、柱暦ぢやア御座いませんから、早わかりとは參りませんですよ。一月から二月三月、十二ヶ月の其間を、順序を立て

お話し申さなけれァ成らないのですが、御免なさいまし、お尻が大きいので長く座つて居ると足が痛くなりますから、斯うちよいと立膝と出掛けまして ね、それでもッくりと申し上げますよ』

『もッくりでは困ります。日も短いし、氣も短いし、大躰の處を掴んで話したら如何だねね』

『それァお前さん、髪結の事ですから、千條萬條の髪の毛を、一握りにして摑めない事も無いのですが、それには髪の毛を一本々々、數へる樣に梳櫛を當てた後で有りませんと、こんがらかつて却つて手間が掛ります』

『こんがらかッたら面倒臭い、鋏で切つて了うばかりの事さ。妾は廻り諄い事は虫が好かないからねね。何んだねお大さん、用といふのは、どんな事ですねね』

『お望みなら仕方が有りません、引くるめて申上げると、少々お金子を頂戴致したいので……』

『髪結錢でも拂はずに有りましたかい』

『いゝね、如何致しまして』

『それぢやァ如何いふ譯でお金子を上げる事になるのかね。妾には如何も分らない』

『ですから、それ、順序を申上げやうと申したのぢやァ御座いませんか。ねねお前さん、妾には髪結の他に本業があるので御座いましてね、年末の事でも御座いますし、中々忙がしう御座いますよ。これはお前さんにくど〳〵云つて居ちやァ、迚も話が纏まりさうに有りませんから、斯う仕やうぢやァ御座いませんか。手取り早く奥さんにお目に掛らうぢやァ御座いませんか。ね、然う仕た方が早う御座いませうせ』

『お種に言つて分る事で、妾が聽いて分らない事は有りません!!!』

『左樣ですかねね、ぢやァ又同じ事を申して見ませう。如何かお金子を少々頂戴致したいもので……と云つたからッて、タヽ貰ふ譯では有りませんよ、貸した物を取りに來たのですよ』

『お前のいふ事は少しも分らない』

『それ御覽なさい、分らないでせう、お前さんは何んと今言ひました。お種に言つて分る事なら、妾が聽いて分らない事は無いッて……處が、それ、分らないぢやァ有りませんか。ですから、此所へ奥さんをお出しなさいましよ。然うすれァお前さんに分らない事でも、チヤンと彼の人には分るのですから。不思議さ』

お大の舌先頗る優勢。粂乃は敵情に暗く甚だ不利。

これを聽く、一間には博士と平内腕を組み。此方の一間には泣伏す種女。

《五十五》

お大はぐいと手を延して、粂乃の膝前の煙管を取り。

『お先煙草で御免なさいよ』

無遠慮に煙草を捻込んで、一吹して。

『妾は雲井か國府かと思つたら、こりやァ大層臭う御座んすね。芋の葉で御手製ですかい』

と云つて煙草を投出す。粂乃は急いで取上げて、吸口を襦袢の袖でキュッ〳〵と拭いて眼を三角、唇を一文字。

『おや〳〵何かお氣に障る事でも申しましたか知ら。これでも腹の中は何もない女ですから、悪かつたら勘忍して下さいよ』

とお大、立膝の上に肘を載せて、片手を懐に納ひ込み。

『如何で御座いますね。奥さんにお目に懸れませんですかね。それなら又それで仕方が有りますよ。筋をお前さんに、如何しても通さなけれァならないですからね』

と云ひかけて、後へ向き。

『お錦どん、濟まないけれど、お茶をちよいと飲まして下さいな。お客樣あつかひに仕なくッても好いのだから、お茶卓には及ばないよ』

錦やは金切聲で。

『生憎お湯が冷めて居ますよ』

『おや〳〵奥樣が妾風情に借りをお拵へなさる程だから、鉄瓶の下に火の氣の

絶えるのも道理だ。仕方が無いね、冷水でも洋盞でお呉れな」

『生憎ですねね、鉄管の掃除で水道が切れて居るのですよ――』

『大層ッツケンお仕だねね。そんなに威張られた義理でもなからうぢやないか此間途中で逢つた時に、天ぷら蕎麥を驕つたら、涙と鼻水と一所に啜つて嬉しがつたぢやァ無いか』

「あ、あんな出鱈目を……」

『まァ好いよ。それ處ぢやァ無いよ。此方には大役があるのだから、お前に關つて居てお客樣を逃がしちやァ大變だ……ねねお前さん」

と衆乃の方に向直つた。

「實ば奥さんとお花を引きましてねね、ねッ、お花を御存じ無しか。善人で居らッしやるね。レコの事ですよ」

と高からぬ鼻の先を指頭で示したが、未だ衆乃には分らない。

「ねッ、平ッたくぶちまけると、花歌留多で賭博をするのですよ」

「賭博!!!」

衆乃は後へ倒れかゝつた。

「はい、正木博士の奥さんと妾は賭博を打つて、勝つたのですよ。其時現生で頂けなくッて、手形でお出し爲さつたのを、此所に悉皆持つて居ますよ。年末の事ですから、一先づねね、綺麗に下げて頂きたいのですがねね」

○　○　○　○　○　○

種女は博士が絶壁から墜落したのを見て、心配した時のやうに、これはとても生きては居られぬと考へた。死んで了うより他に自分の罪は消えぬと思つた。

去かし、座敷の内には深谷は無い。若し有つたら無論飛込むで居るのである。

（五十六）

突と博士は出來つて、お大と衆乃との間に座し。

『溝谷さんの手紙を持つて來たのはお前だね』

お大は輕く會釋して。

『左樣で御座いますよ』

『手紙の事はすべて承知したから、溝谷さんに然う云つて取りに來て下さるやうに……』

『旦那、それァいけませんよ。いくら洒蛙突くでも、溝谷さんがザカに取りには來られませんやね。妾は此所に自分の頂戴したのと、袖子さんの分と、それから溝谷さんの分と、ちやんと手形を揃へて持つて來て居るのですよ。何んなら今日ねね、如何か取替にして頂きたいのですよ』

『然うか……や、それでは宜しい、計算して、銀行手形を振出して上げる。直ぐと取りに行くがよろしい』

『旦那、誠に濟みませんですねね。貴郎の樣に早分りがして下さると、どんなに心持が好いか知れませんよ。又ねね、旦那も時々引きに入らつしやいまし。此道は又別で御座いますよ』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

お大が勝手元から立出ると、錦でも決死掛けたのか、ケンが吠付いた。此方では衆乃が博士に吹付いて。

『直さん、まあ、如何したもんだね。今日の有樣は如何したもんだね。いねさ、直さん、何んといふ不始末だね。正木の家に取つて此位大きな恥辱は有りませんよ。お前が獨斷であんな嫁を娶るから、這んな事に爲つたのだよ。嫁が賭博を打つとは何事ですね。呆れたと云はうか、驚いたと云はうか、妾ァ最う御先祖へ對しても申譯が無い。直さん、如何する考へだね、此上は如何お仕だね。お前の覺悟を聽かしておくれな。直さん、ね、直さん!!』

博士は唯腕を組んで。

『如何も、困つたですな、覺悟と云つて別に……』

疊をたゝいて詰寄つて。

『全躰お前さんがぐず〳〵だからイケません。屹度所分を仕なければ成りませんよ。恰度先方の伯父も見にて居るし、話が仕好いといふもんだからね』

と言つて、鼻紙で眼端を拭いて。

『言はないこッちやァ無いのだよ。あんな山の中から、年の行かない者を連れて來たんだもの、這んな間違のあるのは當前だよ。直さん、お前が餘まり映

好き過ぎるからさ』

《五十七》

昔氣質の鎌田平内、枯尾花木枯に狂ふと見る。心亂れて足下よろめき出で、一間に泣伏す種女の襟首取つて引据ゑ、無念の涙を拂ふよりも、不始末の折檻、親身の打擲に痛腕を遣つて。

「こら、種、お、おぬしは、ね、ねらい事を仕居つたのう」

種女は泣入つて、面を袖に埋めて居る。

「こ、こら、種、泣いて濟まうかい。涙で博士樣のお顏の泥が落ちるなら、そら、何んぼでも泣けやいぢやが、泣いて濟まうかい、泣いて居てこれが濟まされようかい。こ、こら、種、お、おぬしは、まア、ね、ねらい事を仕居つたのう」

種女は絶入るばかりに泣咽んで、一言も口に出し得ぬ。

「こ、こら、種、私は今の今まで、私はな、お前の出世を喜んで居たのぢやわ

ね。行儀も好く爲つた、容貌も美しく爲つた。衣服から何から結構づくめで見迫へた程立派に成つて居るので、ど、どの位私は嬉しかつたらう。死んだ弟夫婦にも見せたい。それは如何しても出來まいが、せめて村の人達になりと一目見せて自慢か仕たいと、今の今まで思つて居たが、聽いて吃驚ぢや、ありやァ何事ぢやい。こ、こら、やい、種、外面は東京へ出て美しう成り居つたが、腹の内は何んぢやい。戸隱村に居た頃は、そ、そんな見下げた和主ぢやァなかつたぞよ。魔が射したのか、やい、こりや、何んといふ不始末ぢや。正木樣へ嫁に遣つたからには、私の儘にも爲れまいが、打擲ぐらゐでは手ぬるいわね。中院の山案内、久山家から代々扶持を頂戴して居た鎌田の家ぢや、刺殺して私も切腹、む〳〵、切腹でも仕なければ取返しつかぬのぢやもの」

又もや振上げた手を、後から支へたのは正木博士である。

「何んぼ伯父さんでも、亦、種に不始末が有つたにしても、兎も角も正木直輔の妻ぢや。打擲はいかん。それァ止めて下さい」

「いや、旦那様、それは然うでも有りませうが、打擲は情愛でありますぢや。弟夫婦に代つて、私が戸隱で育てた内に、一度でも打擲した事は有りませんが、斯うした場合ぢや、これが折檻せずに居られませうかね。それとも博士の妻ぢや、私の女房ぢやから、手出しを爲るなと仰有るなら、お前様も無理に此娘を嫁に仕なされた様に、私も無理にでがす、無理にも離縁を取つて、信州へ連れて歸りますぢや。全体此縁談鈎合はぬと蹈んで、私は最初から不承知でがした。餘りの身分違ひ、年齢も亦違うでがす。間違ゐの有つた時には、それ見た事かと云はれるのがつらいで以て、平内初めから不承知で御座りました」

息を切らして、喘ぎを入れ、張切つた肩に波を打たせて。

「連れて歸りませう、はい、不都合至極の種女、平内、屹度了簡が御座りますわね」

博士は両手で頭を抱ゐて。

「困るなァ、如何も……それでは不可。まァ能く落着いて話してから……」

次の間から走つて來た衆乃が、博士の袖を引いて。

「何んといふ事です。伯父のする通りに爲してお置きなさい。お前さんは此所へ出るのぢやァ有りません。何處までもお前さんが甘い顔を見せるからいけないので……彼方へお行きなさい。此方は妾達に委して置くものです」

嚴命である。

（五十八）

博士は姉から追立てられて、研究室へ入るの已むを得ぬに至つた。

今は早や安樂椅子の上に倒れるより他には無い。又しても思はれるは、戸隱山中の大岩壁。彼の鳥蔓が編出した自然の釣床の、それに身を載せた時と同し感情が浮んで、此安樂椅子が寸斷に切れて、谷底へ身が陷るやうならば好いとまで考へた。

餘程面倒な事である。學術なら研究の道があるが、然うして其結果に何物をか得られるのであるが、斯うした問題を深く考へるのは、愚の極だ。第一研究の

仕様が無い……仕様が有つた處で、何物をか得るのでは無い、失はねばならぬのである。

何故一家の内の事が單純に行かないだらうか。自分は單純を愛するのである。種女の單純な性質を愛するのである。然るに意外である。種女は自分に隱して花牌を手にした。秘密の借財を少からず造つた何故そんな事を仕たのだらう。扨それに就て自分は如何いふ判決を下したら好いだらうか。

姉と伯父とに一任して置いて、好いだらうか。自分は何も言出さぬ方が好いだらうか。それから極めて掛らねばならぬ。困つた事だ。何にしても困つた事だ。これといふが、姉さんが來て、花の稽古なんかに行けと言出したからで、溝谷のやうな奴に交際を始めたからで、白濱の家へ通はせたからで、お大なんかい來るやうに爲つたからで、溯つて行くと自分が信州へ行つたから事が起つたので、戸隱へ寄らなかつたら好かつたので、寄つても表山へ登らなかつたら好かつたので、登つても谷底へ落入りさへ仕なかつたら好かつたのである。

何故岩角から足を踏すべらしたらうか。そんな事を今考へても仕方が無い、其時種女が眞心で以て自分を救護して呉たのは、忘れやうとしても忘れられぬ事實なのであるから、自分も亦種女の墮落といふ事に就ては、飽くまでそれを救護する義務がある、大責任がある。然り可憐なる種女!!!彼の女は今泣いて居る。伯父に呵られて居る、姉から罵られて居る。可哀さうだ。行つて助けて遣らう。然うだ。斯うしては居られない。

と博士は想起して、俄然、安樂椅子から離れやうとしたが、姉から又追立てられるかと思ふと、これにも困つて、力なく再び身を投落した。彈力は淵に小石を投げた如き音を發して、博士の心臟に響きを傳へた。然うして此所に寐て居てはいけぬ。早く行つて遣れとすゝめるかのやう。

（五十九）

平内は種女を突放して、膝の上に握拳を猊犬形に置いて、今は早や光の鋭い眼をしばたゝき、改まつて衆乃に向ひ。

「不所存な姪、身分不相應な出世を致しながら、申譯の無い事を仕出來しまして誠に早や情けない女で御座りますぢや、これといふが、種を前に置いて申すのも何んで御座りますが、身分不相應といふ事が、平内最初から心配で、はい、如何も私には腑に落ちぬで御座りました。賭博打つて大金の借財を拵ねたのは、皆是から出て居るでがす。ぢやで、今度のやうな事が有つて見ると、益々以て安心が出來ぬでがす。こりやァ貴女樣、今の内に離縁を願つて信州へ連歸つた方が、大きな間違の無い内にで、双方の爲だらうと考へるでがすが、どんな物で御座りませうて……」

茲に衆乃の理想がある。博士直さんの嫁には、簞笥長持を擔込んで來て、三指でお辭儀をして、遊ばされ言葉を遣ふ人でなければならぬのである。種女が憎い譯では無いが、自分の理想の要点は悉く具備して居らぬ人である。大事な弟の直さんの嫁には、不足も不足も大不足である。此際だから、向ふから言出したのを幸ひ、離縁とするのは至極の良策と考へて、一も二もなく。

「それ〳〵、妾もそれが双方のねね、爲だらうと考へますがねね」

と未だ言切らぬ詞を、突入つて、泣伏した儘の種女叫ぶらく。

「妾は厭です。妾は旦那樣に見捨てられやァ仕ません。屹度妾の罪は少るして下さるだらうと思ひます」

衆乃は苦々しげに。

「にッ、如何したとお言ひだね」

種女は此時面を擡げて。

「旦那樣は、妾をお見捨てなさらないと思ッてます」

と言切つて、又他愛なく泣入つた。

「何んで見捨てずに居られやうぞ。こら、種!!!」

と平内、向きかへして。

「こら、種、お前は元來が、親にまで見捨てられた子ぢやぞ。おう、捨子ぢや山帽子の花が雪の樣に散つて居た中に、可愛や埋れて顔だけが出て居たのを熊にも食はれず、私に拾はれて、これまでに育つたのを、いやさ、知るまい何んにも知るまい。私は知らずに育てるので、どの位苦勞したか知れぬぞ

よ」

「わッ……」

餘りの奇事。衆乃驚いた。

「花の中に埋つて居たのは、誰の捨子でも御座りませんぢや。裏山道と越後道との間の、種沖で心中した弟夫婦のわすれがたみ、はい、夫婦心中でがす。賭博の爲に首も廻らず、遺書を私へ宛て、子供を頼むと、そればかりぢや。死んだ弟夫婦の屍骸を見るより先きに、飛んで行つたのは、境の宮。蟻子が刺すので泣入つて居た種を、山帽子の花の中から抱上げて、今日まで長い心配をしたでがす。今此樣に泣入つて居る種の躰の大きく成つたのを見ても、私には彼の時の赤兒としか思はれませぬぢや。呵りはしてもお前樣、種の前で言つては何にも成らぬが、私、眞から可愛うてならぬでがす。私の方から云へば、出世も何も入るものか、何處までも自分の傍へ置きたかッたでがす。此方樣へ嫁に寄越したのは、又捨子したやうな氣がして、はい、花の中へ捨てたと思つたのが、茨の中で御座りましたわい」

情茲に極に達し、老爺聲を放つて泣出した。

（六十）

聲あり、天の一方。

「いけません、貴下方に任しては置かれんですなア。私が種の罪をゆるす!!!それで好いでせう。誰が何んと云つても私がゆるすと云ふ。最うこれで明瞭です。種は何んと云ひました──妾の罪をゆるして下さるだらうと思ひます──と云ひました。それで最う好いのです。種は私のゆるすといふ聲を信じて居るのですもの、それで好いぢやア有りませんか。前から私は言つてある。種は一家の主婦としては無能ですが、學室の助手としては忠實に働きます。どちらが成功しても、人の妻たるには少しも差支有りません。姉さんは一家の主婦たらしめるべく仕込まうとして、失敗したぢやア有りませんか。私は學室の助手としてなら、立派に教育し得る見込があるのです。何故姉さんは、自然に委して置いて下さらなかつたらうか。伯父御も亦何故自然に逆らはうと

仕やうとするのですか。不可ですな。不可ですな。斷じて不可ですな。種さんは直輔の種さんです。妻は夫のものぢやア有りませんか。それで最う話は分つとる。新舊思想の衝突は、現今の如き社會では別してまぬかれぬ處ですが、今まで私は勉めて避けて居たけれど、已むを得んから、思切つて申します。姉さんが本統に私の爲を思つて下さるのなら、家の經濟は取締つても下さいぢやが、妻の敎育は御免蒙りませう。私の妻は私の心の儘に爲して下さい。私は又妻の心の儘に爲して置きますから、いね、何んと有つても然う願ひます。それでは世間へ出されないと……よろしい、研究室から外へ出さなくつてもよろしいのです。種は外交官の妻では無いのですから、へね、學者の妻なのです。種も亦研究室から外へ出やうとは思ふまいね。おう、然うであらう。然うあらうと私も信じて居た。其所で改めて云はう。伯父御、種を再び花の中へお捨てなさい。戸隱の逆さ川、何處まで水が逆さに流れませうぞ。自然に委せて置くものです。戸隱山は植物の寶庫、窟の中に二人住む時も來りませう。我等の生活は必ずしも東京とばかり限らんですからな……』

新春、正木博士の著述『花の進化』は出版せられた。

どの新聞にも其廣告が出た。が、どの新聞にも亦、花の師匠の花軍と云つた樣な標題で、鏡古庵の弄花事件、某々等拘引の事が掲載されぬは無かつた。

花

終

明治三十六年六月廿六日印刷
仝　三十六年七月　三日發行

著者　江見忠功

發行兼印刷者　東京市日本橋區通一丁目十七番地　青木恒三郎

印刷所　大阪市西區新町北通一丁目六十五番屋敷　嵩山堂印刷部　電話西七八貳番

發行所　大阪市東區心齋橋筋博勞町角　青木嵩山堂　電話園東貳五〇番

發行所　東京市日本橋區通一丁目角　青木嵩山堂　電話園本局七八九番

賣捌所　伊勢四日市市堅町　嵩山堂支店

著作權所有

定價金四十錢

花